

特234
248

512



始



特234
248



父の語りよ



教子の

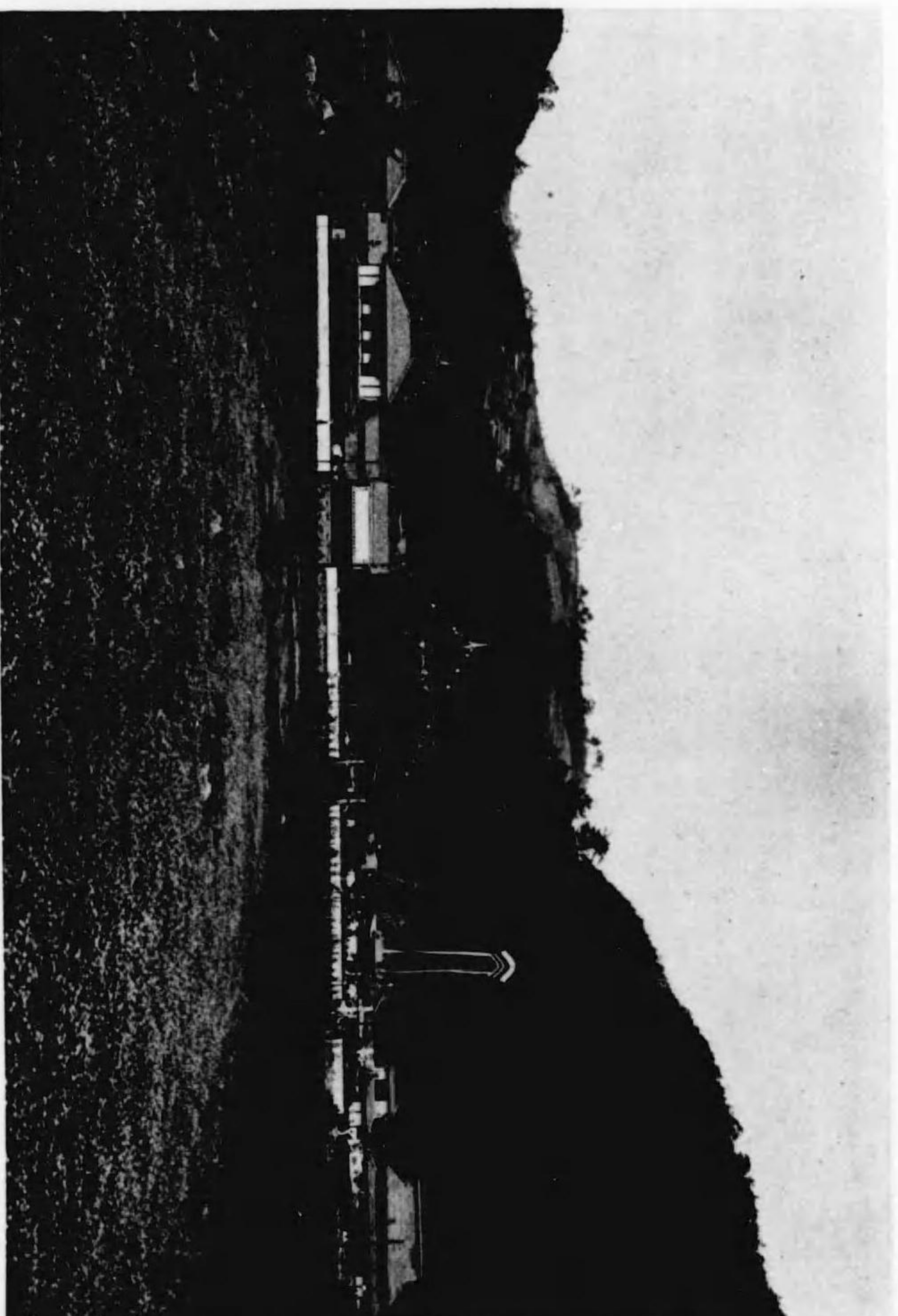
七十四公羽記帳

あかひついで集

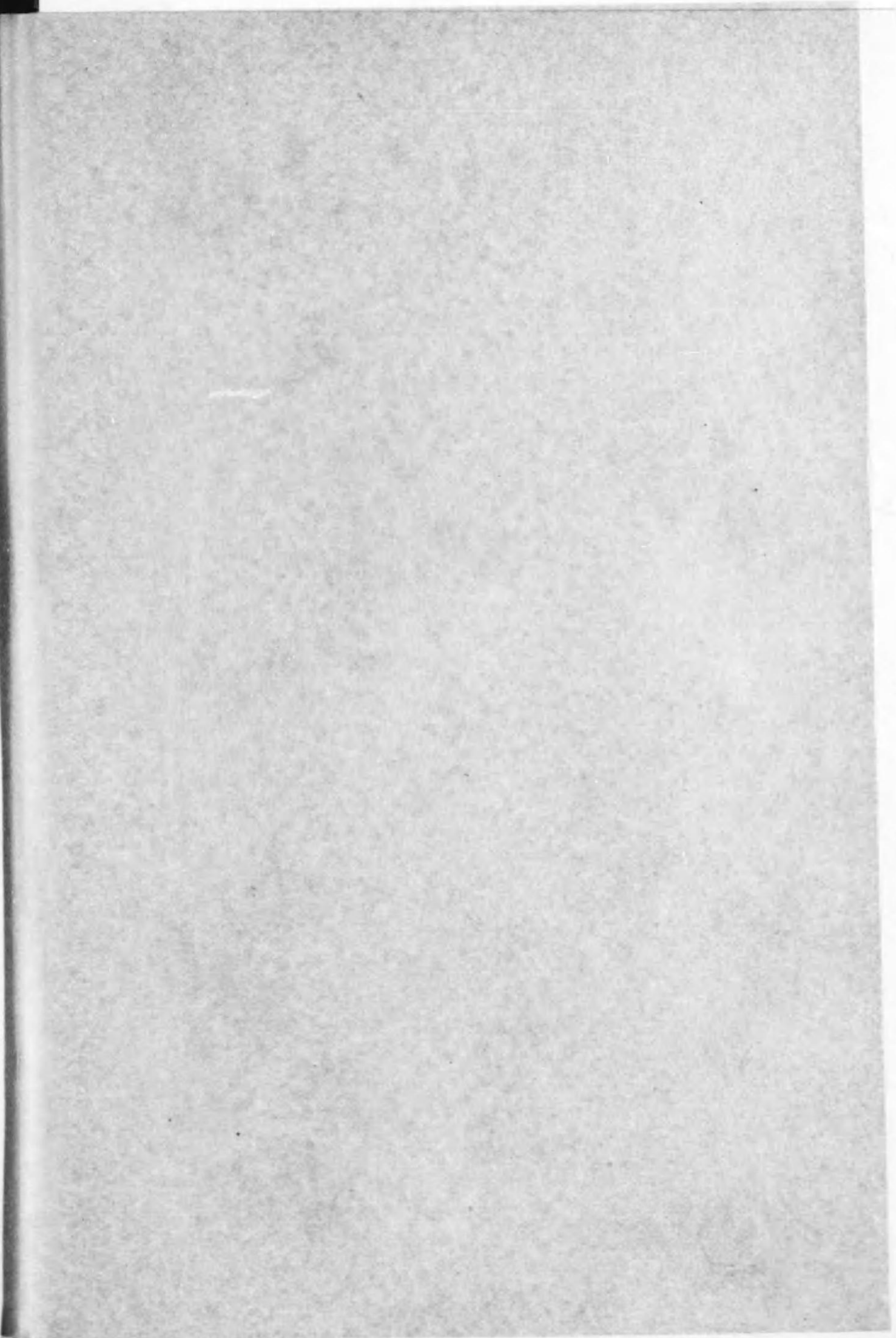
茶花集

こゝろ

まはら

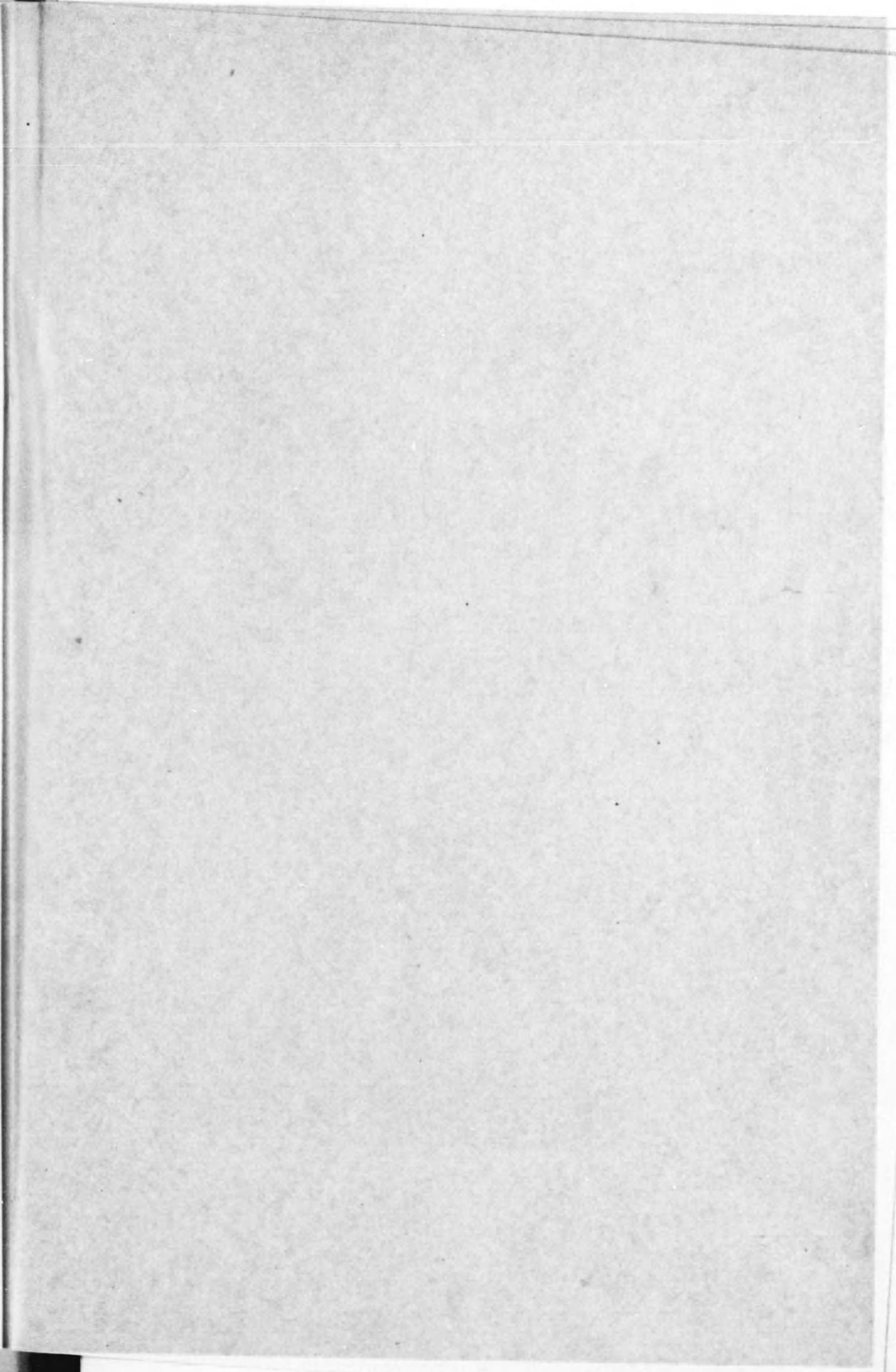


景全所會教備藝教光金





肖像

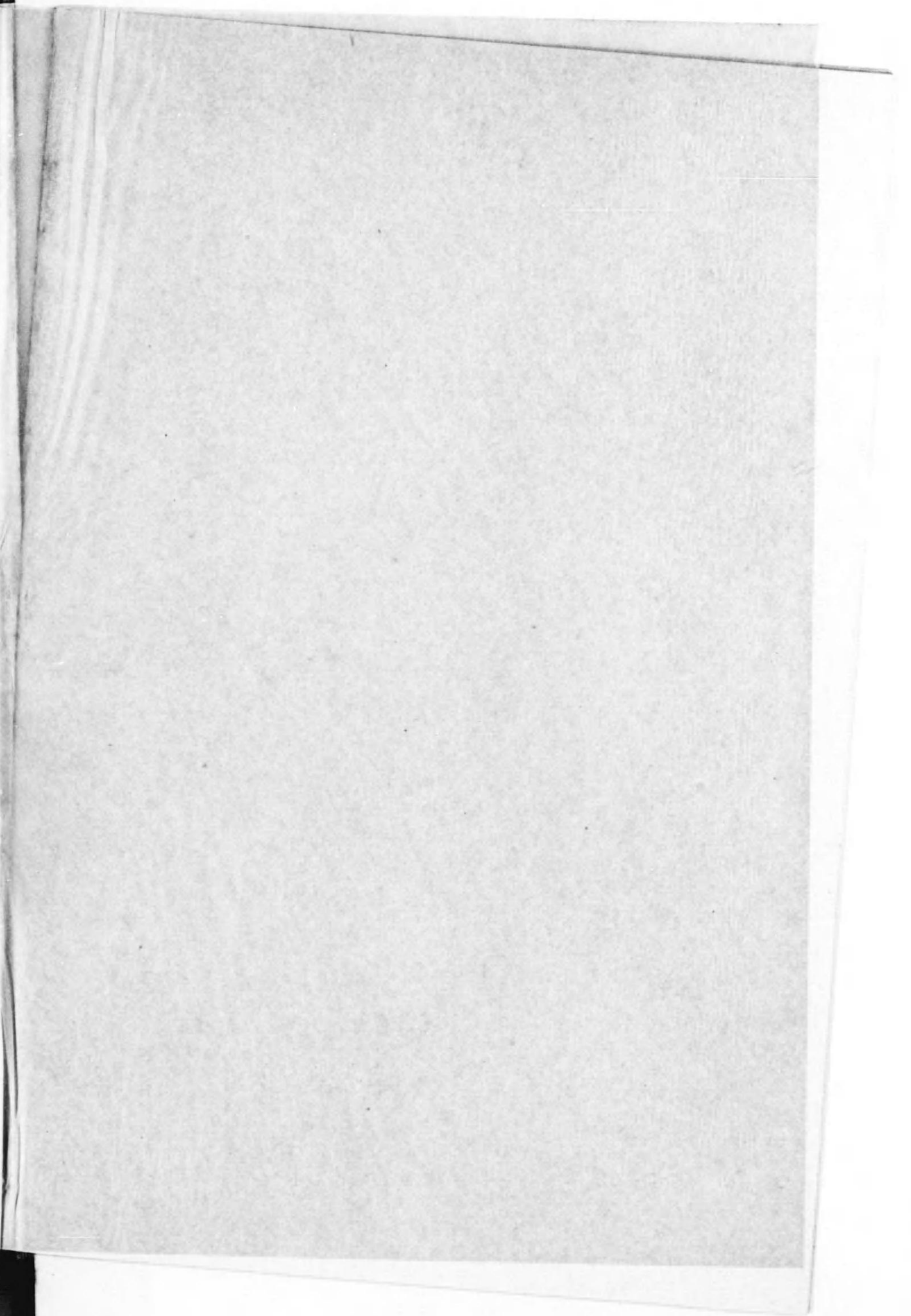




寄附志願
吾人等が
けいせき
送る
力
を
尽
す
べ
し
と
す

山
平
は
つ
と
久
三
山
を
下
に
五

筆 自



目次

佐藤範雄先生題詠

父の語り草……………(正雄筆記)…一

經歷追加……………(自筆手記)…六

あとがき……………(正雄記)…三

寫眞目次

佐藤範雄先生御歌

金光教藝備教會所全景

肖像

金光教大教會所新築祝祭の際

菅長閣下御廣前様に御祝詞を言上せるところ

目次

自筆家………對面頁

墓地………

「上開き」の所の路………

初めに掘りし教會の井戸………

二度目に掘りし教會の井戸………

教會の石垣………

大町………

(本文割註の中の寫眞參照頁數は寫眞に相對して向へる頁の頁數なり)

父の語り草

正雄筆記

生れから云ふと、父幸逸。母むめ。母は後月郡芳井町大字川相河合家より來る。一番始めの子、生れたまゝ死に、次が砂代。これは高屋町奈良之木、山下伊喜次郎へ嫁ぐ。その次松代。四つの歳疱瘡にて死し、その翌慶應二年九月九日午後三時、四時の間に私が生れた。幼名は菊之丞。菊の節句に生れたと云ふので、さう名けたと云ふ事である。後、之丞が禁ぜられて菊治郎となり、十七歳の頃、茂久平と改む。

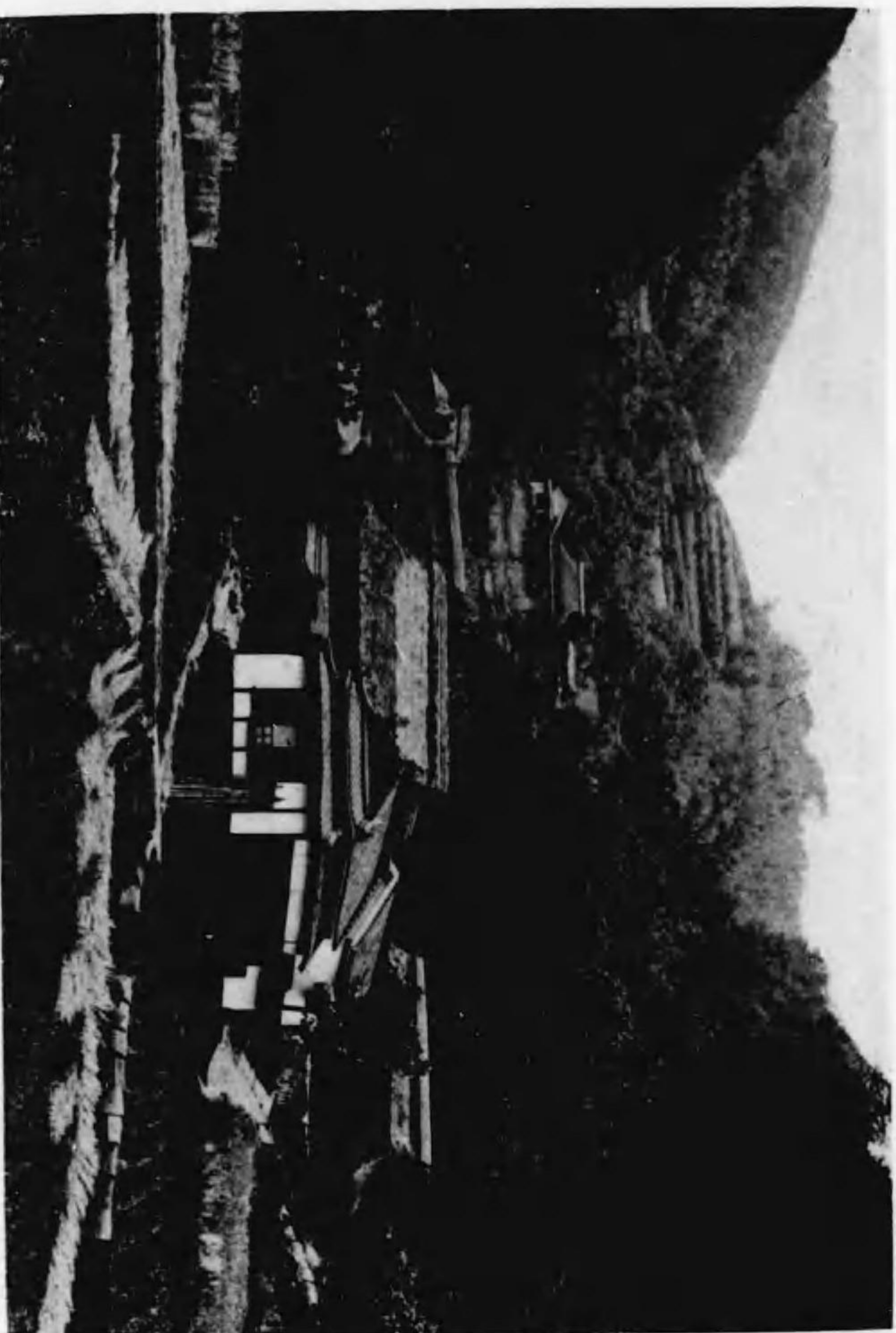
五つの歳の九月二十五日、弟鷹市(十三歳にして出家し、釋法傳と改む。現岡山縣小田郡笠岡町通照寺(眞言宗)住職)生る。その弟と四つ違ひにて母妊娠し、加ふるに父股に腫物出來、その爲め度々大江の醫師の所へ私が通うた。その年は早魃甚しく、父働かれぬ爲め、

母が田の水の世話をして居り、過つて仆れて流産し、それより身體すぐれず。姉砂代、その年「奈良之木」に嫁し、その年頃より負債十圓二十圓位出来、「下の田」を質に入れたりした。母は經濟に上手な人で、病氣の中で工夫し、として家計を維持せられた。

九つの歳二月より手習に上り(父の煩ひし年)十の歳二月麻疹をして、その熱のさめぬ間に、池へ鮒を釣るのを見に行き、ひきかへし(再發)その年冬まで學校へよう行かず、途中まで行き頭が悪く嘔吐が出たりした事もあった。冬寝て居るのを母が見て、蒲團の量がすくなうなつて居ると云つて心配し、醫師にかけ、快くなつた。十二の歳からそばきを打つたり、種

おろしなど私が出した。麥の種をおろしたり、溝をつぶしたりした。十一、十二、十三の三年大旱魃であつたが、夏田の水の世話を夜充分寝られぬ。そして秋米が出来て、唐臼挽きの時、夜食に米の粥が喰べられる。それを起きて待つて居る。その時思ふた。

家
生



十人出てえ越ぬれそりあ山に前 戸十数戸の中谷 里に谷々宮町屋高郡月後縣山岡
と呼と「表」を家の上左 び呼と「やひ」を家の上右の家生丁六を凡てせ合下上野坂

『親と云ふものは難有いものだ。あんなに夏中辛抱して米をつくり、自分
分は麥飯ばかり喰べて、米を子供に喰べさせる。』

母は、

『子供の時には甘いものが欲しいものだが、町へ行つて買うては喰べな
欲しいものは云へ。家で拵へて喰べさせるから』

と云はれ、町で買うて喰べるのは、恥のやうに教へられて居つた。

十の歳始めて一人で『川相』(後月郡芳井町大字川相。高屋町宮ヶ谷。母の生家。)へ行つた。『石谷奥』(半
程の間人家絶えたる山中)が淋しかつたが、祖父母が大變喜んで呉れ、寒い時であつたが、

『よう來た。大きくなつて出世せねばならぬが、心を確かに持て。その
日勘定を忘れるなよ。その日勘定とは、その日に御飯を喰べたり、下駄が
減つたり、足袋がちびたり(消耗する事)したのと、その日に働いた仕事と勘定して
どちらが多いか。それを忘れぬやうにせよ』

と云はれた。それが心の中に残つて居る。四五日して歸る時、祖父が

送つて来て、『石谷』〔石谷は高屋町の内にして、川相より歸れば、宮ヶ谷に近く、最早僅かに十町を餘すのみ〕まで来たなら、もうお祖父さん歸つてもよいと云つたと云ふ事で、祖父が我宅へ来て、『菊は石谷』まで来たならもう歸つてもよいと云つたが、こちらまで来た』と云つて笑つた。神様と云ふ事、『張田』〔御領の内〕の金光様の事を知つたのは、十三の歳の春であつたが、『平石』〔高屋町内〕の高橋常吉と云ふ人、無斷家出し、どちらへ行つたかわからぬ。我家が媒介した事でもあり、他の親類も寄合うて相談してもわからぬ。先生佐藤範雄先生が大工しながら拜んで居られ、『明日十時まで待て、様子があらう』と云はれ、その通り『有田』〔小田郡〕の茶屋の亭主から鹽賣りにことづけて〔托し〕、手紙を持つて來させ、かう云ふ人が來て居る。要る人なら今日中に迎ひに來なさいと云うておこした。先生の仰しやつた通り合うたと云ふ事を、父が『平石』から歸つて來て話された。その父の話聞いた時、心の中で思つた。張田の金神狸とみんなが云うて居るのに、そんな所へ行かれねばよいに。お母さんがわるい〔氣病〕のに、この上

狸まで來ては困られやうと思つた事を覚えて居る。

私は元來手習が嫌ひで、よく叱られて居つた。後には泣き出す。無理に讀まされるのはつらかつた。父は學問をさせよう／＼と思つた人であつた。

十四の歳秋の稻刈前まで學校へ行つて止めた。下等一級の半分どころまで止めた。それから翌年春中止めて居つたのを、夏始め「上開き」〔山畑の名、三頁寫眞参照〕の芋を植ゑて居る所へ安原先生、安原由興先生がわざ／＼來て呉れられ、もう四五日後に下等全部の卒業試験があるから、晝來られねば夜だけでも來い。教へてやるから。さうしてその卒業試験を受けよと云うて呉れられ、日本歴史、日本地理、讀本、外國地理、外國歴史、算術等皆やるのだから、なか／＼やれるものではなかつたが、兎も角も安原先生の容易ならぬ御親切で、さうして井原へ行つて試験を受け、下等を卒業させて貰うた。下等が八級から一級まであつた。

信心の事は明治十二年夏、全国にコレラ大流行し、木野山様を迎へて来て、『山手』(高屋町内の小字)から『田口』(上同)まで、『宮ヶ谷』(上同)、『宮賀』(上同)凡て家々を拜んで廻つた。コレラは支那の狸が渡つて来て肝に喰ひ附くのだ。それで木野山様の狼を迎へて来て拜めば、その狸を喰ひ殺して下さると云ふのであつた。その内に『竹の下』(高屋町内の小字)の上の堰溝(せき)に狸が一疋死んで居つたと云つて、『町』(高屋町内の町形を成して居る所)からも井原からも見に来た程騒いだものだつた。その中に『小谷』(宮ヶ谷の中のある家の屋敷にし、生家より一町程離れ居る)の權造(本名清八)と云ふ人が死んだ。老病で死んだと云ふ事で、谷中の者がそこへ集つて喰ひ飲みしたから木野山様を拜まれぬやうになつた。

その頃一般の風習として、死人のあつた所へ出入すれば、それが忌みとなり、神様を拜む事は出来ぬと云ふ事であつた。ところがその夜から『表』(生家の丁度上の家の屋敷、二頁寫眞参照)の元治さんと『ひや』(上同)の文吉さんの家内らが吐瀉をし出し、そのうめき聲が我家まで聞える。丁度その晩に我家のお母さんも病

氣が起つた。それは喘息であつたが、誠に心細い事であつた。その時に『表』のお婆さんに連れられて御領へ参つたのが、お参りをする始めてあつた。その『表』のお婆さんと云ふのは、今の由宇教會長杉田廣平氏の祖母である。

さうして始めて先生に御目に掛り、御理解(おんりかい)を承つたところ、金光様には忌みがあつても拜んでもらくと云うて呉れられ、それが難有かつた。天地を司る神とも教へられた。十四の歳、舊八月の事であつた。先生は新七月三日より、大工を止めて神前に勤められる事となつたのだから、二三ヶ月目であつた。それから殆んど毎晩そのお婆さんについて参つて居つた。半紙を四つ折にしたものに書いて大祓を習うた。それが永いことあつたが、いつの間にか無くなつた。

その後十五、十六、十七、十八とずうつと参つた。先生はお留守の事もあつたが、井原の萩田書店で買つた用文章を持つて行つて、先生に見て貰う

た事もある。寒中外で字を習へば手が上ると云うて、硯が凍るのに外で習うて居た事もあつた。その頃、

「大きな石でも一人では持ち上らぬが、多勢力を揃へて上げれば上る。家内中勢をそろへて信心せよ」

と云ふ様な御理解を先生から承つて居つた。その頃は魚を釣りに行つても、願ひすればよく魚が喰ひつく。十八位までさうであつた。ところがそれ程お蔭を受けて居るのに、少し我儘が過ぎて、腹の病氣をこしらへた。

明治十四年十六の歳、六圓五拾錢宛持つて伊勢参宮した。所謂「ぬけ参宮」をしたのだ。「奈良之木」で支度して出た。藤井梅太郎、西村三郎治、西村清次郎、山本林七、大村關太郎に私の六人連れにて、夜明けに高屋を出て、その夜は岡山京橋東詰津山屋へ中等と云ふ相談で泊つた。所が翌朝法外な請求をした。「それはいかぬ。昨日矢掛でこれの宿引きぢやと

云うて相場づけを呉れて居る。上等参拾五錢、中等貳拾五錢、下等拾八錢とあり。中等のに参拾五錢呉れと云ふ。中等と云つたのを上等へ泊めたのか」と云ふと、「さうではない。中等へ泊めたのです」と云ふ。「それでは貳拾五錢でよからう。」いや此所は田舎とちがひ、水まで買はねばなりませんから」と、瘠せたお婆さんが云ふ。「さう云ふ事があるか知らんが、吾々は昨日朝立つて生れて始めて宿についたのに、さう云ふ事をされては、吾々道中するものは困るから、理非を警察へ出て正してから、道中を續ける積りぢや」と云つたら、「それでは貳拾五錢でよろしい」と云つた。それが後に金光教の信者である事が知れ、藝備教會へも参つて来た。よく話すお婆さんであつた。三階へは遊女を置いて居た。後にそこへ講話に行つた事もある。その談判を私がして勝つたものだから、それから道中ずつと私が一番歳が若いのに、何事でも掛合ひ事があると、みんなが私にさせる。先方でもよく知つて居つて、どこで知れるものか、始

一●
めての所であるのに、話と云ふと私の所へ持つて来たが、不思議な気がした。

伊勢で煙草を買ったり、奈良で角筒を買ったりして、壹圓五拾錢か貳圓か足らぬ事になり、友人に借りて歸つた。當時家計が餘り豊かたなく、多少借錢もして居る中であつたから、私が又そんなに參宮したりして金を費うたので、父が叱るだらうと思つて歸つたところ、叱る所か、喜んで酒を買つて祝うてくれられた。その時謠うたり踊つたりせられたが、お父さんの踊られたのは、その時始めて見た。借錢は煙草を賣つて拂うたと云つて呉れられた。待ち衣には堅くづしの絹糸の入つたのを買つて呉れ、「奈良之木」のお定さんに縫うて貰うた。ぬぎ下げになつて困つた。瘡せて居つた爲め自身が合はなんだのだ。

翌十五年の秋(十七歳)「奈良之木」のおばさん(姉の姑にして、後その三女き野を娶り妻とす)が大病で、御祈念に通うて行つた。その冬、氏神様の兩社の棟上があり、村中賑やか

にあつたが、「奈良之木」や我家では大心配であつた。「御神米が咽喉を越せば助かる」と教會の先生が云うてくれられたが、それが越して助かられた。

翌十六年舊三月三日から高山寺の本堂の落成大法會があり、稚兒も出、大客をするので、私にも給仕に来て呉れと云はれ、行かうと思つて板場で髪つみ(散髪)をして居る時、腹痛が起り、轉び廻つて苦しんだ。神様は奥納戸と出居との隔ての長押に祭つて居つたが、寢て居つて拜むのに苦しくて、大祓が半分も上らぬ。母が教會へ參つては、御神米を頂いて歸つて呉れられて居た。その時に思つた事を今によう忘れぬ。神様が參る事を喜ばれるものなら、夜寢ずに參つて拜んで歸り、又參りしても、その方がこの痛みよりはらく、にあらうと思つた事を今に忘れぬ。四十日も困つたかなあ。それから益々お蔭が立ち出した。

十六年八十何日間雨降らず、大旱魃で米が四俵程しか獲れず、毎日二合

宛使ふ事に母が割當て、十七年は降り過ぎ不作で、米が高くなり、一石四圓になつた。一俵賣りに行き、壹圓六拾錢になる筈の處、樹足らずで切れ、壹圓五拾貳錢か受取つて歸つた事がある。

十八年舊四月五日結婚した。(前記同町「奈良之木」山下清作氏三女き野を娶る)その冬に玄米を四俵残して居つたのを、二俵盗まれた。正月米は一石程白米にして居つたが、苦しい生活であつた。十八年舊盆の十四日に高山寺へ參つて、歸りて「奈良之木」へ盆禮に行つて居る間に、大洪水が出て、「池の奥」から家の附近全部の田が水害を受けた。それ迄十六年から十八年の盆までは、おかげが立つた。藍にあまこがついても、にがきをせぬでも(にがきの汁で藍を洗うてあまこを落す事)あまこがおちたり、作物がよく出来たりした。十六、七兩年雨が降り過ぎたのだが、それでも作物がよく出来た。難有いくで過した。十八年の秋から十九年の春へかけて大水害を受けた中に座敷を建てた。麥が大分あつて、それを賣つて雜用に當てた。それか

ら引續き「池の奥」の大普請をした。水害に遭うた所をなほしたのだ。その普請をして居る時、四月十九日か二十日であつたが、大きな雹が降り、(雹の降りしその日、先生は井原の足次神社で神佛の大論戦をして居られたと云ふ事である) 麥を叩き落され、十四五石ある筈の麥が、四石あまりしかなかつたが、それが皆「しいら」麥(實の、いらぬ麥)であつた。麥の食ひ残りは、座敷を建てる爲めに、先に賣つて了うて居り、取れる筈のものが取れなんだのだから困り、上開き(山知の名、三頁真參照)へ仕事に行つて居り、辨當を持つて來いに行つたら、麥に麥の碾割粥(碾割粥)を持つて來た。麥一升に米を一合位入れてたものであつた。

盆には麥粉で、麥きりと云ふものをして、饅頭の代りにし、芋團子を拵へたりした。家の經濟がさう云ふ風でもあり、「奈良之木」の前から、「明治」(高屋町の内)の後ろの方の水害復舊工事に出て働き、一日辨當を持つて行つて、七錢貰ふ。八錢呉れる日もあつた。辨當は固より麥飯であつた。二十

年の二月から備前兒島郡の「林」へ「木之下」(高屋町内)岡本與市、「池尻」(宮ヶ谷内)高橋重三の兩人と「乙島」の叔父が行つて居る所へ、私も仕事に行つた。兒島の小田村「柳田」、「稗田」、「福江」、「曾原」の四ヶ所の道路の石垣を、四十日程掛つて築つて來た。家の經濟が苦しかつたから、他所へ出て喰ふだけでもよいと思つて行つた。えらかつた。「木の下」の爺さんの鎚も持つて行かねばならぬ。十七八里歩いて行つた。一番始めに兒島琴浦村の「上村」まで行つた。宿では朝晩の炊事を私がして居つた。正雄が生れたと云ふ葉書が、「曾原」へ來た。それから二十日程して歸つた。壹圓五拾錢程金を持つて歸つた。二七夜して名をつけたのだが、その時には未だ歸つて居らなんだ。

兒島から歸つてから、笠岡井原間の街道の小田郡「岩倉」と井原の奥の「長川」といふところの石垣を築いた。それはお金を呉れなんだ。兒島へ連れて行つて貰うたお禮奉公の様なことになつた。その頃は「木之

下」の爺さん(岡本與平氏)が、お前が居らねば出來ぬと云ふ程になつて居つた。

その間も時々腹痛があつた。信心はして居つても、只頼むだけの信心で、魚を釣るのでも、藍のあまこを落すのでも、願ふのはお願するのだが、教を聞かぬのだから、眞と云ふことには無關係の信心であつた。しかしお蔭はよく受けた。正雄が生れて、母親の乳が痛んで、それがお願したら一夜になほつた。又正雄の頭にづやんぼ(腫物)が出て、それをお願したら、翌朝耳に血膿が出て治つた。お願さへすれば、お蔭を受けて居つた。二つの歳引きつけが來て、少しづつ歩きかけて居つたのが、又よう歩かぬやうになつた。晝から一度程引きつけた。眼を見つけるのだ。その夜も一度あつた。それだけであつた。正雄の右の指が今に弱いのが、その爲めてあらうかと思ふ。その秋であつたか、正雄が赤痢のやうで、大分遠のいたと云うて數へられるやうになつてからでも、夜二十五遍も通じがあつた。

又身體中へ卵半分位の腫物が出来た事もあり、それは明治二十一年秋頃のことであつた。

それより前に、神様の御教を自分で受けるやうになつて居つた。夢で先生が歸つて來られるとの教を受け、その翌晚教會へ參ると必ず歸つて居られる。歸つて居られぬ時は、未だ歸つて居られませんかいなあと云つて居ると、そこへ車で歸られると云ふ風であつた。

二十一年舊正月二日から、「西」(奈良之木の隣家に
て西と云ふ屋敷)の留藏爺さんが大患で、みんな心配して居つたが、十四日の晚、助かるとの教を受けた。その時分、「池の奥」の「山すそ」(所の名)の上の「河内屋山」の石を貰うて、父や吉(佐能卯平と
云ひ、家族
同様にして
成人せし者)と一緒にその石を割つて昇いて歸り、「すま田」(生家の直ぐ
前の田の名)などの石垣に使つて居つたが、十四日の晚、その仕事をして歸つて、床に祀つてある神様を拜んで居つたら、「西」の爺さんが助かるとの教、「手みくじ」を受け、手がずうつと上つた。(神様は正雄が生れる時にはもう床に祀つて居つ

た)「西」へその事が傳はつて、

「宮ヶ谷の茂久平さんが御祈念して居つたら、お爺さんが助かるとの教があつたさうな」

と云つたら、お爺さんが涙をぼろり／＼落した。

「お爺さん助かるのがつらいのかのう」

「なんの嬉しいのえ、子や孫もあるが、みんな拜んでくれては居るか知らんが、本家の婿(茂久平のこと)が、私が助かるやうに拜んでくれて居るかいのう。嬉しいのう／＼」

と云ひ、水を供へて呉れと云つてそれを飲み又飲みした。翌十五日朝、年中行事のお粥が少し喰べられた。髭を剃つて貰ひ度いと云つて、こ／＼と笑つて坐つて神様を拜んだ。

それから暫くしてから、近所の若い者が參宮(伊勢)して、土の鈴を土産に呉れて居たのを子供に貰うて、その鈴を箸にくゝりつけ、それを振つて神

様を拜んで居られた。全快して子供の守をして居られたが、その秋死なれた。

その年舊五月の末、向ふ(生家)の「墓の段」の畑(左の寫)に豆を植ゑて居り、その耕作をして居る時、暑い日であったが、

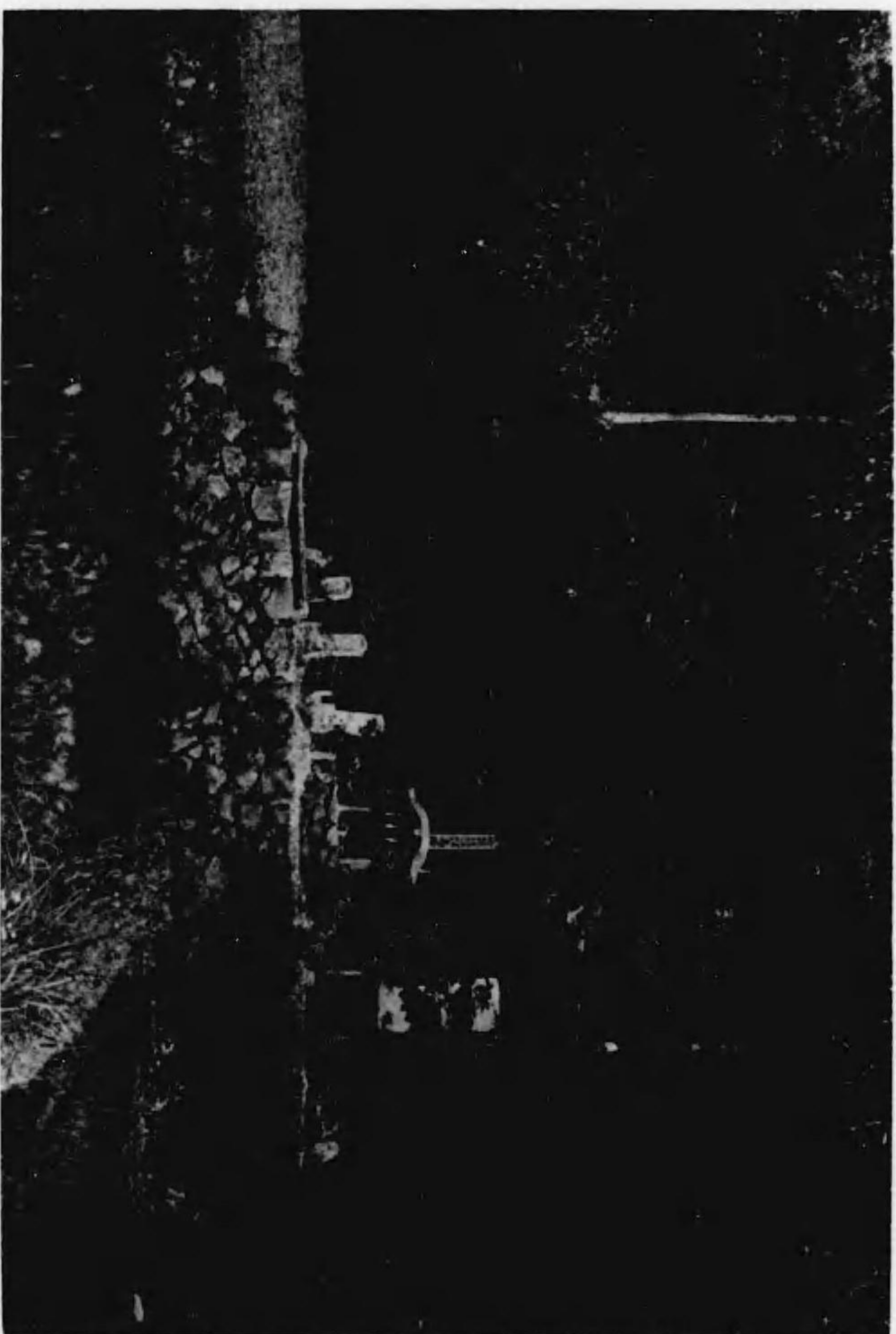
「暑いと云ふ事は、今日様の御威光である。それを嫌ふのは、今日様を嫌ふ事になる。それでは信心にならぬ。「奈良之木」のお父さんは坐つて斷食されるが、私は今日様と仲善うして仕事をしながら、世の中の爲めに盡さう」

と決心した。

「この修行が貫けば、日本國中から駕籠を持つて迎へに来るやうになるぞ」

との神様の御教があつた。それから笠も冠らず、手拭も冠らず、神様の御威光を身體にしみ込ますと云ふ氣になつた。日は覚えぬが、それから

田 墓



よ呼と「段の墓」を畑の方左へつ向るけ横に地墓 牛町一そ凡り在に向の家生は地墓

少し後に、

「私は國家の法律を犯したのでありませんから、監獄へ入れられて修行することは出来ませぬが、神様の掟に背いて御無禮を重ねて居りますから、神様の懲役をつとめさせて下さいませ。食物はまづい物を少し喰べさせて下さつて、農業をさせて下さい」

とお誓ひし、お粥でも、雑炊でも、盛りがよくても、わるくても、二碗に定めて居た。ある夜お粥が出来てそれを二碗喰べて寝て、翌朝々食前に「向ふ(生家の向ふに
ある家の名)」の上の山へ柴刈りに行き、坂路をぐるりと廻る所の上の方で、荷をこしらへて棒を刺さうと思ふのに、力が無うて、腹がわがりついて、曲りついて棒が刺せず、どうしようにも仕方がなかつたことがあつた。夏から秋へ掛けてその二碗宛の修行を仕通したら、米俵がかつげぬやうになり、色は黒く瘠せてしまつた。しかしそれで腹痛はすつかりなほり、喰べ物に不足が少しも無くなつた。それまでは柔い、硬い、鹹い、あまいの不足

ばかり云うて居った。

その前後であつたらうと思ふ。

わが物を皆世のものとして見れば

みな世のものがわがものと見ゆ

と云ふ歌を詠んだ。俵がかつげぬやうになつたけれ共、秋の仕事は皆して了つたが、冬になり、寒さが身に泌みかける頃、冬の寒さを嫌ふのも、神の御威徳を嫌ふことにあたるからと思ひ、單衣物一枚で氷がはつても霜が降つても、肥料をかけたなり、「沖」(高屋の町形を成し居る地方の田地を「沖」と云ひ牛里程も距り居れり)の方へ行つたりして居た。風が吹けばしんと泌み込むが、風が止むと又暖かくなる。食物を減らす方は長くもせなんだが、夏笠を冠らず、冬、單衣で過すことは三四年續けたらう。

秋の仕事が済んでから、或る日、本部へお詣りした。私一人であつたが、「西六」へも「入田」へも「御領」へもお参りして、宅へ歸つたのが十一時を過

ぎて居つたらう。「向ふ」まで歸つて見たら、家の様子がちがひ、燈があかあかと點つて居る。どうしたのかと聞いて見ると、九十五になられる曾祖母さんが風呂で尻餅をついてこけて仆れ、お父さんが負うて歸つて、寝させましたと云ふ事であつた。その夜は神様へ参つた留守にそんな事が出来て、濟まぬことであつたとお詫びして寝た。別に痛い所もなく、翌日横山醫師を迎へた。名は敏夫と云ひ、正雄の生れる時には、その人の養父を迎へたが、「明治」の所まで來たら、もう生れたと云ふので、そこから歸つて貰つたと云ふことである。診察して見て、中風が起きて、それで立てぬやうになつたのだ。お年がお年だから、お大事になさい、お薬はお好みになれば上げますがと言つて歸つた。どうせ葬式をせねばなるまいが、他人に米を搗いて貰つてはと思ひ、一晚に米を二臼位搗き、それから紙緒（紙）の草履を造つた。それも葬式の用意の爲めであつた。五日位さうしてから考へついた。これではいかぬ。信心の方へ心を入れねばと思ひ、毎夜

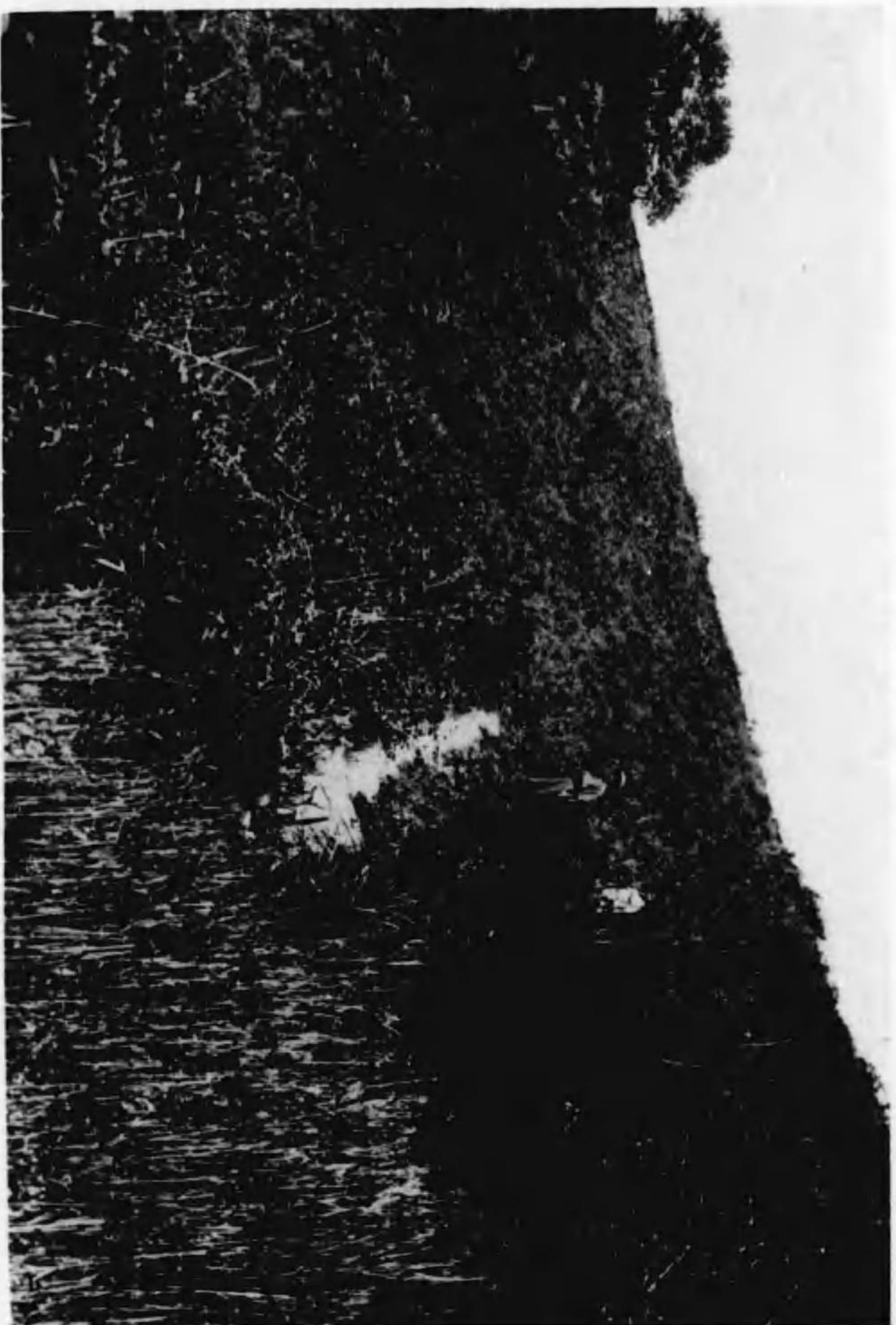
米を携いてから、教會へ参つたり、草履を三足位造つてから、教會へ参つたりして居た。(金をつかはぬやうにと思ふ所から、草履や草鞋を造つたのだ。) 舊神殿が御廣前であつたが、山通りを参り、山通りを歸つて居つた。

さうして五日程参つた時、月の明るい霜の下りた晩であつたが、「上開き」(山畑の名、教會へ山通りを参拜する途中に在り)の上の東へ向けて路の一番曲つた所まで歸つた時、ひよつと、神様のお知らせがあり、立止まつた。

「寅の年の氏子は若い時から、九十五の今日迄、家の爲めに容易ならぬ勤めをして、家内中大恩を受けて居るが、今壽命が終つては恩送りが出来て居らぬ。これから一同心揃うて、恩送りの眞心になれば、三年の壽命を延してやる」との御教であつた。

その曾祖母さんは、のぶと云ひ、小田郡大江村高原爲造氏の娘で、(忠三と云ふ弟があり、その人は後月郡出部村へ出て家持をし、高原の後は熊吉と云ふ人が立てた)高橋家五代目九十郎の妻として來た人であるが、九十

道の所の「き開上」



呼と「き開上」が、たえ生の妻に、道前眞窟でしに、道山を参り、教會開きより、か生りな所、て立の(子信と雄正)物入てしに、角り曲の上の、そはしげ受を教りな御ぶ

郎と云ふ人には兄弟が多くあり、兄に友右衛門と云ふのと、紋造といふのとあり、姉には「石谷」(高屋町内)へと「木之下」(同上)へと嫁したるものあり、弟は「平石」(同上)へ別れた。九十郎との間に娘が二人あり、姉のリウに「山野」(廣島縣深安郡山野村)から林三郎と云ふ養子を迎へ、妹のおそよといふのは「芦原」(廣島縣深安郡加茂村)へ嫁いだ。林三郎は長男幸逸(茂久平の父、幼名芳右衛門)を生み、五歳の時離縁して歸つた。その時リウの腹に子が宿つて居り、生れるのが近くなつてから、リウは「山野」へ行つて産んで置いて歸つた。雪の降る日に「奈良之木」まで一人行き、磯八方から二人の足形があり、「山野」へ行つたと云ふことがわかつたといふことである。後、リウに西江原村(後月郡西江原)の「サイチゴ」から黒木といふ家の喜代造といふ人を養子に迎へ、その間に「乙島」(淺口郡乙島)へ行つた友三郎と、「大原」(淺口郡聖庄村)へ行つた理與とが出来た。リウは三十八にて死し、その時幸逸は十七歳であつた。喜代造は鰥で一人居れば家に置くが、嫁を貰へば置かぬと云うたところ、「高草」(高屋町内)の小田原から嫁を貰ひ、夫婦養

子として「市場」(上)の能島といふ家に行き、後、そこから歸り來りて「段原」(上)に家を構へ、後復た「奈良之木」の「新屋」へ移つた。

幸逸へ「川相」から嫁を貰うたが、(御ち渡久)それが弱いので家の事はその曾祖母さんが、自分の代と娘の代と孫の代と三代續けて持つて下されたのであつた。家の爲めに容易ならぬ働をして呉れられた人と云ふのは、それが爲めである。

性來篤實な心の廣い人で、曾て怒ると云ふことなく、横着氣怠る氣がなく、道具類でも他の者が取り散らして居るのを片付け、義弟に道樂者があつて、それが我家の山で荷をして來るのに、悪い顔もせず、却つてエイトウくとして(前に盛り與へたるを、未だ食し終らぬに、他の梅に盛り上げて運び行くの意)御飯をついて持つて行つて喰はせて居つたと云ふやうな人であつた。他の人にはやね、いい人(悪い人)も姉さん々々と云つて慕うて來て居つた。正雄の襦袢ひまで洗うて貰つて居た。いつも食事は二椀づゝに定め、間食をせず、蜜柑が好きであつた。他の者が

遊んで居らうが、朝寢をして居らうが、ちやんと起きる時に起き、縁側で髪をときつけられる。その手つきを今も見るとやうな氣がする。そして朝食の用意をされると云ふ風であつた。

かく家の爲めになり、みんな大恩を受けた人であつた。それで前に云うた教を受けたので、「上開き」の所から走つて歸つて、みんな起きよくと云つて起し、寢ずに介抱して居る人もあつたが、神様の前にみんな集り大祓をあげて、かくくくの神命があつたと云ひ、孝行しようぞ、それはさうせねばすまぬ、しようくと云ふ事になり、その夜は安らかに休まれ、翌朝便通つうじがあり、らくになつた。お粥を喰べると云はれ、それから快くなられた。足は立たななんだが、氣分が快くなり、按摩が嫌ひな人で、便所も工夫して座敷の中へ拵へて上げ、單りひで躰むつて行つて居られた。

さうしてお蔭で助かられてから、丁度三年経ち、明治二十四年十月三十日の午後三時四時の間に、芦原の大叔母さんが、ひよつこひよつこ來られた。

『芦原』の秋祭に誰れも来なんだから、お母さんを見に来たと云うて、土産に蜜柑や揚物(天麩羅)や竹輪など持つて来られた。その夜風呂をわかして曾祖母さんも入れてあげ、お萩餅が好きであつたが、それを拵へて上げ、喜んで喰べられ、私は教會へお萩餅を持つて参り、夜更けて歸り、家の外で神様を拜んで座敷へ入り、寝たら、茂久平々々々とお父さんが呼ばれ、起きて行つて見ると、言を云うてでない。吉(佐能)を教會へ参らせ、横山醫師も直ぐ来て呉れたが、今度はもうどうもなりませんまいと云つて、『宮の前』まで位歸つた頃、戸の隙から明け方の光が入つたが、その時死なれた。一人の娘がこちらから何も云うて行かぬのに、前日来て、思ひ残す所なく話をし、一夜並んで寝て終られた。金光教式に改式がし度くて仕方がなかつたが、さう行かず、葬式だけは高山寺にして貰ひ、後、直ぐ改式した。

明治二十一年麥蒔の濟んだ頃より、教會へ御用に行くことになつた。教會には本家の長屋を取り除けて、二階附の八疊間のお臺所を建てられ

た。その二階で先生が御食事をせられながら、山本(豊師)を呼べと云はれたりして、廣島三上先生(一彦師)に習うてお歸りになつた。語學のお話が出る。

敷島の大和心を人間は

朝日に匂ふ山櫻花

の歌について、語格の解剖などされて居たが、そのお話が私には少しも分らなんだ。二年三年何にもわからず、廿四年春末か、夏始めてあつたか、夢で教を受けて初めて文法がわかつた。翌日教會へお参りして、先生に申上げたら、どうしてわかつたかと云はれ、後、三上先生に申上げて下さつて、講習證書を貰つて来て呉れられた。そのお臺所の御普請の爲めに、後ろの山を掘つて屋敷を廣くし、土を『良山』へ荷うて通うた。一荷持つて行つて歸る間に、お廣前先生が丁度大被を一巻上げて居られた。拜み通して居られた。『小谷』(宮ヶ谷のあゝ一家の名)の向ふの山の本を切つて持つて行つて、上

の段へ一間に九尺位の木小屋を建てた。大變喜んで下された。二十三年九月に、安部朝吾と云ふ人醫學士になつて歸り、衛生講話をした。その時飲料水の大切なことを聞き、教會に井戸なき故、直ぐ参りて井戸を掘りなさらねばと申上げしに、御廣前先生がこの屋敷には水が出ぬのぢやさうなと云はれる。私が地球には上に土があつて底には石があります。それを突き抜ければ是非水は出ますと申上げ、お廣前先生から、先生へ申上げられたところ、先生、どこへ掘ると云ふのかと云はれ、炊事場の出口の一間程ある所に掘ると云うて居りますと申されたら、

『それはえらいことを云ふ。私は昨夜夢を見た。注連を張つて居る。何をするのかと問ふと、井戸を掘ると云ふ。さうか』

と先生も喜ばれ、それから四神様(貫行之君)に伺はれて、いよく掘ることになり、『奈良之木』(山下伊喜次郎氏)や『川尻』(山下佐之市氏)と一緒に掘る。『奈良之木』の兄はその秋インフルエンザで四五日寝て、それから教會



戸井の會教しり掘にあつ

へ参り出した。それ迄はどうしても参らなんだ。私が夏、「奈良之木」へ
行つた時、涼臺の上でからかひ半分^に兄が云ふ。

兄「お前は信心するが、何かよい事があるかや」

私「よい事と云うても、あまりよい事もないが、私は信心し出してから、難
儀をして見ようと思つて居るがのう」

兄「それはよいのう。難儀をする氣になつたら、難儀は無からうのう。
それはよい」

と云つて居つたが、その秋から教會へ参り出した。井戸を二日掘つて
から、私もインフルエンザに罹り、二日目の晩歸るのにフラフラして、その
晩ブランデーを飲ませられたので、それに酔うたのかと思つて居つたが、
さうでなかつた。二日雨が降つたので、座敷で寝たが、えらかつた。便所
へ行くのにもフラフラした。その翌日、麥飯の冷いのに水をかけて流し
込んで、杖をついて教會へ参つたが、掘り掛けの井戸へ降りて、長男ちやうなん（鶴嘴）

を二つ三つ打ち込んだら、フラー／＼としたが、それでも休まず、井戸を掘り終るまで御用が出来た。足が腫れたりしたが、休まずに出来た。

二十四年の舊正月二十二日の祭典に参拜者が多勢あつて、舊神殿が狭く、外へまで人が立つ程であつた。その夜みんな歸つてしまひ、後片づけをしまつてから、その時はもう私一人残つて居つたのだが、先生に申し上げた。「先生、かう狭うなりましては、教會を建て替へねばなりませんまい」と申し上げたところ、その時、先生はもう寢て居られたのを起き上られたと、後に云はれたが、「何處へ建てるのか」と云はれる。

私「本家の家を東に取り越して、後ろの山を一間程掘れば、廣い屋敷が出来ます。」

先生「それでは鐵道工事のやうな事をするのか」

と襖の内と外とで問答した。四神様にお伺ひされたら、お許しになつた。春が過ぎて夏になり、秋に入つてから、木を買ひに行けと云ふ事にな

り、「田口」(高屋町内)の國三と云ふ木挽が「丹生」(上同)の堺松を買うて切つて居るのを見に行けと云ふことになり、私が行つて見たら、切り口が乳の所位まであり、四圓と云ひ、真中を一通り鋸を入れるのを一圓で請負ひますと云ふ。先生後にて云はれるのに、普請にかゝる時、金を二圓五十錢持つて居つたと云はれる。その木を買うたのが買ひ始めて、次には「瀧山」(教會の直ぐ)で石を割つて居るのをかうて、「川尻」と「奈良之木」と「西」(奈良之木の隣家)の久さんと私と四人でかついで來た。それが石の買ひ始めてあつた。五年の春三月の下旬に圖面が整うて、四神様にお願ひしたら、井のしるしをしてお下げになつた。これは井戸ですかと申上げたら、井戸ぢやと仰しやる。今の廣前の井戸で、本家の庭の出口の處に掘つた。

その井戸が出来て四五日した時に、
「高橋恐れ入つたことがあるぞ」

と先生が云はれる。前の井戸の水が出た時、初水を一合瓶に入れて、本

部の御廣前へお供へせられた。そのお供へせられた水と云ふのは、前の井戸を四日位掘った時、お茶の休みに上る時、少しづつと云ふので、摺鉢位に土を窪めて置いて上つたところ、今度降りて見たら、二升位清水が出て居る。それを四神様のお取次で本部の御廣前にお供へされた。先生が恐れ入つたことがあると云はれたのは、今度の井戸の水初穂をお供へせられ、その後で四神様の御許で夕飯を先生も御一緒に頂かれ、

「奥様恐れ入りますが、お水を少し頂き度う御坐ります。」

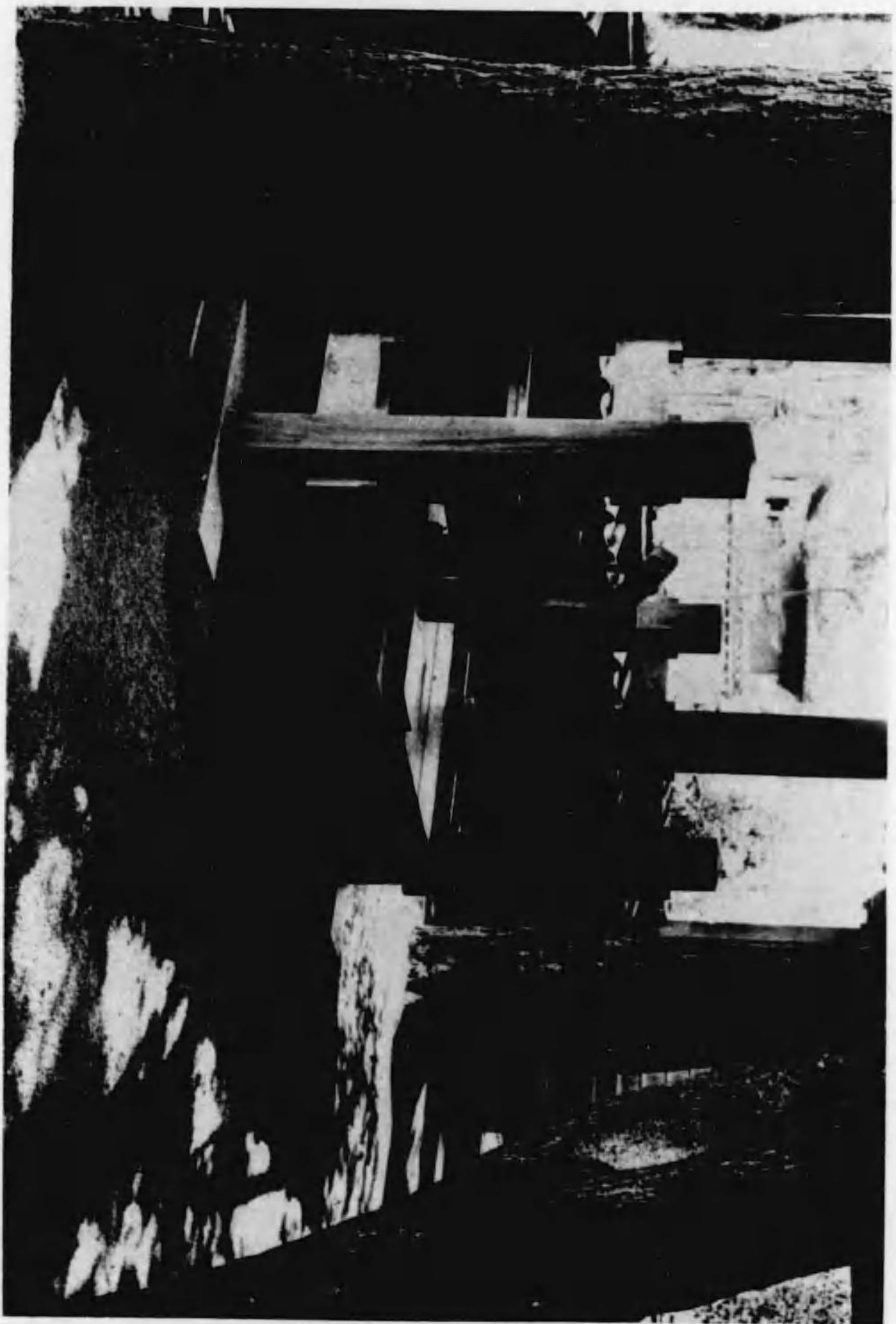
と先生が申上げられたら、四神様が、

「水なら少し待て」

と仰しやつて立つて御廣前へ行かれ、これを頂けとてお下げになる。

これは何で御坐りますかと申上げられたら、

「前の井戸の時の水初穂ぢや。今度のがお供へになつたから、お下げになつたのぢや」



井戸の會教しり堀に日度二

と仰せられて、それを頂いたが、少しも變つて居らなんだ。何と恐れ入つたことではないか、と云はれた。本家が吉五郎様の代に「法成寺」の水見が来て二度見て、どうしてもこの屋敷には水は出ませぬ。大岩が底にあつて、どうしても水は出ぬと云うたのであつた。ところが實際掘つて見ると大岩はなく、海の埋れた後で、一丈も掘ると砂が出て、水が出て来た。前の井戸は砂が二尺程で又石となり、それを三尺も掘り割つたが、二度目のは砂が何尺もあり、底が幾ら砂であるか分らぬまゝに止めてある。

二十五年の夏、本家の家を取り除け、秋から山を掘つて工事に掛ることになつた。その頃平人夫が辨當持つて十三錢であつた。日はわからぬが、工事一切を高橋に任せるとのお指圖があり、人夫の雇ひ入れから、木石の買入れ、金銭の出納一切任された。二十五年秋、先生が獨語を云はれ、

「一本續いた木を入れ度いものぢや」

と云はれ、「西畑」(高屋町内)の奥の我家の山に長い木があることを思ひ出し、

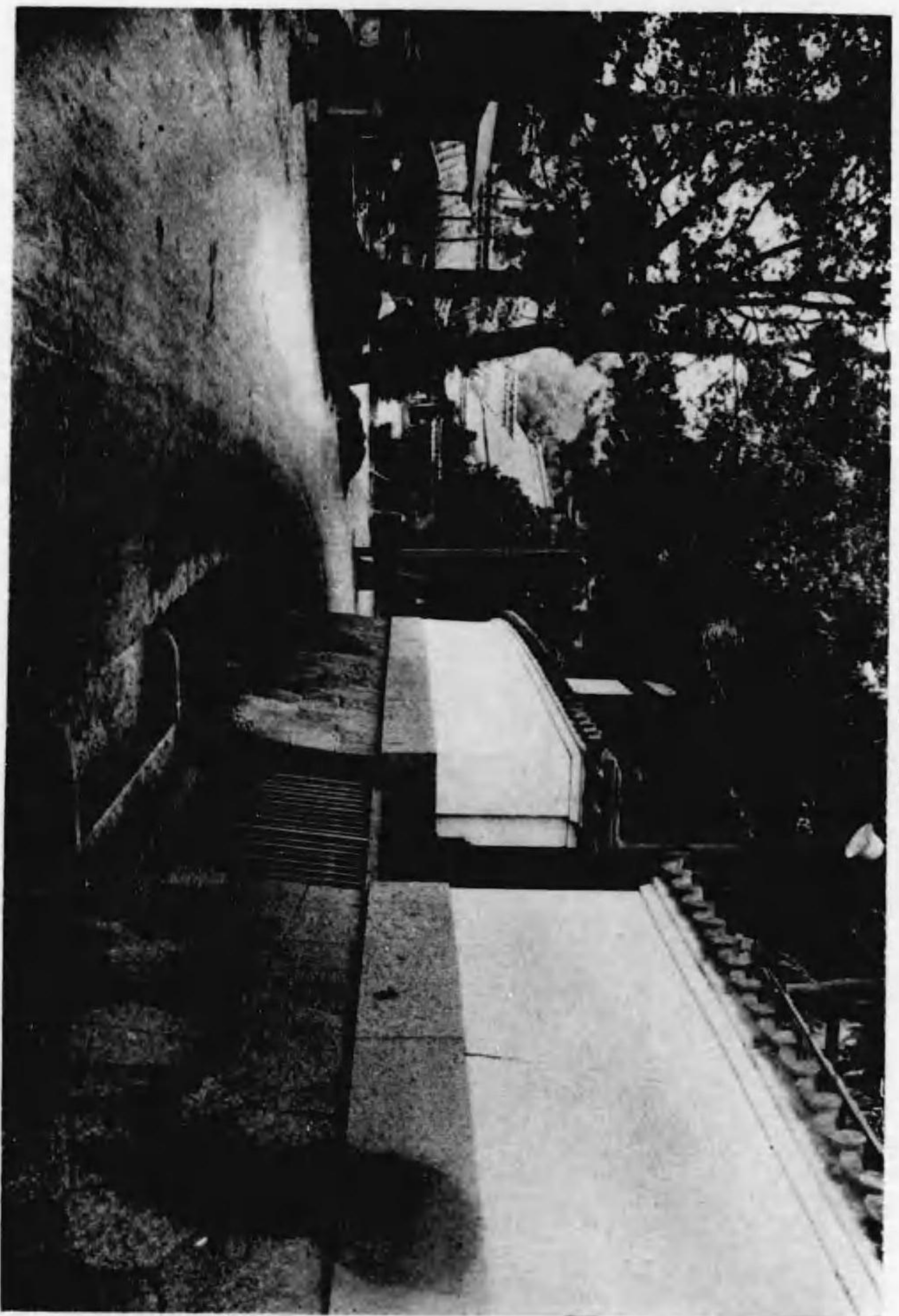
お供へし度いとお父さんに云つたら、快うそれは供へるがよいと云うて呉れられた。お父さんも普請の好きな人であつたが、何度普請しても、その木は切らずに置いて居り、その下へ行つては仰いで見て楽しんで居つた木であつた。南宮神社(俗に浦湯)の處へかつぎ出し、山を落して高屋川へおちこませ、川の中を下へくつかついで出て、お大師様の處まで出た。それが二十六年春のことである。教會まで持つて参つたら日が暮れ、先生が提灯を持つて木を見に出られ、ふむ、と云はれ、棟梁が尺棹を當て、見て居たが、ありやくと云ふ。どうした、足らぬかと云ふと、足らぬこともない、餘りもせぬと云ふ。それでは山で切つたまゝに使うて置いてくれと云つた。それが今の舊廣前の中置になつて居る。一本續く木をと先生が云はれたのに、先祖から傳はつた木がお役に立ち、信心も今日迄續いて來たことが難有うてならぬ。その木を切り倒した時は、未だどれだけの家が建つものか、設計の定まらぬ時であつたのだが、それが足らぬこ

ともなく餘りもせず、丁度よくて、山から切り出したまゝ、使うて貰へたことが、嬉しくてならぬ。

さうして農業しながら御普請の御用をつとめた。二十五年の春、石垣を半分位して石工が他へ行つて來て呉れぬ。それから私が鍛冶屋で道具を拵へて貰つて石をついた。それが今も少しは残つて居る。十八年から二十六年まで大水が毎年出て石垣を崩されてはつき、大町(生家の直ぐ傍の田)などは四度までついた石垣が崩れて、五度目のが今残つて居る。(四四頁寫 眞參照)さう云ふことで石を扱つた覚えのあつたことが、無駄にならず、兒島や井原奥へ行つたのもその心得が少しあつた爲めであつたが、それが教會の御用に立つたのだ。農業しながら金錢の支拂、竹、繩、木などの買入れ等、三年の繼續工事の間、一度もお使をおこされることなく、ふと教會へお参りし度くなり参つて見ると、石の話があつて人が來て居たり、木の代を取りに來て居たり、御用があるのであつた。

二十七年の五月一日(舊三月二十一日)落成式を行はれたが、御神靈を本部御廣前から頂くことになり、「奈良之木」のお父さん(山下清作氏)と私とお迎ひに行け、夜通しかついで歸れと云はれ、吉備乃家で支度をしたが夜の十時頃に出來上り、御神體を頂き、七里足らずの道を一度も休まず、小便もせず、夜明け頃お供して歸り、それから「奈良之木」のお父さんは教會の御用に入り込むことゝなつた。私が二十九の年で、「奈良之木」のお父さんが六十一歳であつた。盛大な奉齋式であつたが、道のほとりに山から松の木を掘つて來て、紅提灯を吊る繩を引く杭の代りにしたのが、今の松である。大きくなつたものだ。奉齋式が済んでお供へのお包みをむぎく、一切支拂をして残つたら、本部へ皆奉つて、お禮参りしようぞと先生が云はれ、一切済ませて、七圓か八圓残つたと云うて居つたら、未だ金具の代が七圓か八圓か拂はねばならぬのが残つて居つて、それでは少しも残らぬのう、拍手だけ打つてお禮しよう云ふことになつた。

垣石の身教



りなしき築ら自な部一の垣石のこ

その時に感じたことだが、私が半紙を四つ折にして帳面を拵へて、木代、竹代、作料などつけたのが、今に教會にある筈ぢやが、木代を五十圓拂はねばなりませぬ、石代が幾ら要りますと申上げるのに、御廣前先生が、今日は金が無いと云はれたことが一度もなかつた。それで感じたことゝ云ふのは、氏神様兩社の建築と、寺の本堂七間四面の大工事が、村中の主なる人々が關係して出来たが、それが村社の方は明治十五年、お寺の方は十六年に落成したのに、その後始末が明治二十六年まで十年からかゝり、村中の主なる人々が何度寄合うても落着せず、終には訴訟になり、玉島へ通うたりしたが、たうとう氏神様のは一反幾畝の神田を賣つて支拂が濟んだ。寺の方は金講をして漸く二十六年までに始末がついた。村中の戸長議員などが何十人立會をしても始末がつき難かつたのに、金光様の御普請は、小僧の茂久平が百姓片手に御用させて貰うたのに、一錢の借錢も残らず出来たことは、何と云ふ難有いことであらうと感じた。

御普請が済むと、教師にしてやると云はれ、二十七年九月十七日付で、神道管長から教師試補にして頂いた。その後、教師の検定條規が出来、二十八年春からは試験を受けねば教師になれぬことになった。藝備分所督事神原憲弘氏死去し、その後私が督事になり、二十八年に特派講師とならせて貰うた。二十八年、黒田徳治郎師が、吳、廣島へ巡教し、次に讃岐伊豫へも出張するので、それへ隨行せよとのことであつたが、父がその時云はれた。その父の云はれた事を云ふ前に話して置いた方がよいが、その時までには、二十五年に「沖」の畑を買うたり、「池の奥」の田をなほしたり、田を深く耕して柴を入れたりして、他家のよりも餘程米麥が澤山出来るやうになつて居つた。「沖」の畑を買うたのは、「石谷」の「沖」の畑を一反十六歩借りて作つて居つたのが、明治二十三年に雨が降り過ぎて綿が不作で、その年に出来た綿を全部「石谷」へ持つて行つたが、年貢に足らず、足らぬところは麥を持つて來いと云ひ、少しも引いてくれなんだ。それが辛く

て、二十五年に綿の作れる「沖」の畑を五畝十二歩、吉川氏から五十圓で買ひ、その金を半分は「上劍木」で借りたのだつたが、それも二十七年に拂うた。お母さんが綿の出来る處が出来て、着物を拵へて着ることが出来るよと云つて喜ばれた。さう云ふ事になつて居つた所へ、黒田師の隨行で出よと先生が云はれるので、そのことをお父さんに云うたら、

「お前が今百姓を止めては、うちの家が立たぬやうになるがのう」と云はれた。

「それは立ちますまい。立ちますまいが、これ程難有い神様の信心に依つて、私がお道の御用に出る事で、何所か他所に立たぬと云ふ不幸な家が立つことになれば、うちの家は立たぬでも他所の家を立てばもとくにならるから、お父さんはお酒やお肴がお好きぢやから、百まで生きられて、一年に一反づゝ賣りくしてでもやつて行つて下さい。私の貰ふものは指でついた程も無くなつても構ひませぬ。」

と云うたら、出ることを許して呉れられた。

それから十年もして後に、「石谷」の岡藤定市氏が云うたことがある。

「親父が相談に來たことがあつた。『茂久平が説教に出ると云ふが、それでは家が立たぬと思ふが、どう思うて呉れるか』と云ふから、『茂久平君が出て、あなたが一人やるとして、これから五年やれるかどうか』と聞いたら、『それは五年位はやれる』と云ふから、『それでは五年私に任せて茂久平君の云ふ通りにやらせて見てくれ。五年経つて見込が立たぬ時には、私が止めさせるから、その間一人でやつて居つてくれ』と云つた」

と定市氏が云うたことがある。その後であつたらう。お父さんが少し神經のやうになり、『沖』の畑へ行つて見ると、綿の中へ草が澤山生へて居る。『山手』(高屋町内)の畑にも草が澤山生へ、蓋は枯れかけて居る。どうすることも出來ぬと云つて心配され、のぼせて居られたことがあつた。仕事が出来ぬのをつらがられた。

三十年が濟んで、三十一年舊五月下旬から母上がりうまちで、手が不由になり、りうまち下しを飲み、腹を痛めて食事がいけぬやうになり、教會の方をお暇を頂き、晝夜付き切りで介抱した。何にも咽喉を越さぬ。七日間断食して、私の食事の量を神の徳の力で、母に祭り替へて、母に喰べさせて下さい、と頼んだが叶はなんだ。お前がそんなに断食したりしては、世話が出来ぬやうになると云つて、大變心配された。六月十日が一週間の満願になつた。御飯を炊いて今日からお母さん頂きますと云つて、一箸口に入れたが、咽喉を越さなんだ。大小便は子供を抱へるやうにしてさせました。一度も取りはづさず。遍照寺(弟釋法傳氏)も介抱に來て呉れた。

舊七月七日午後二時頃ふつと調子が變り、氣分も何も變らなんだが、便所へ行き度いと云はれ、起した切り死なれた。

葬式が濟み、お父さんが病中や葬式の入費が借錢になりはせぬかと心

配して居られたのを、二十圓私が貯金して居った。それで全部拂うたと云つたら、安心した〜と云はれ、それからお父さんが私の事を安心して呉れられ、喜ばれ出した。親を大切にすると云ふ事もわかり、借銭もこしらへぬと云ふ事が知れ、安心せられたのであつた。五年と云ふのが、四年で安心して貰へた。お母さんも病中に二十圓程貯金があるから、一と作位取れぬでもらくぢやと云つたら、「そんなら心配ないのう」と云つて喜ばれた。卵湯を少しづつ飲んで居られただけであつたが、四十九日保たれた。

父上が死なれたのは、それから五年後、三十六年十一月二十三日であつたが、その時は松永教會の大祭に行き、壇上氏方で祝詞を書いて居る所へ、「キナ(カ)の誤字)ノチチキウシスグカエレ」

と電報あり。「デンプンワカラヌクハシクシラセ」と打ち返し、祭事をして説教がすんで居る所へ、返電があつて直ぐ歸つた。歸つて見ると、先

生が葬式の用意などして呉れられて居つた。

それより前三十年夏暑い時分、教會から歸つて見たら、家内が一人「大町」(生家の直ぐ隣の田の名)の田の草を取つて居つたが、(四四寫 眞参照)その翌日茂樹(三男)が生れた。

我家の事を放つて、道に出たのだが、子供も多勢あるのに、永の間一度も、家内がさう出られては困るとも、内に居つて呉れらねば困るとも云うた事が無かつた。

(正雄曰く、父がこの話をした時席にありし母の曰く)

「それを私が今思ふのに、あれをなぜ我家の事は心配せずにお出なさいと云うて上げなんだであらうかと今は思ふ」と。

茂樹の出来る前、二十八年の春から九年、三十年頃まで、頭がわるく、説教や祭典があつて出る時には鞆を持つて出られるが、歸つて來ると眼がつむぐやうで、どうも起きて居られず、寝てばかり居つた。

正雄が尋常小學校卒業前に、學校の先生が高等小學へ行くか行かぬかと聞かれた。行かせて貰へるかどうか分らぬ。高等小學へ行くものは、こちらへ集れと云はれたのに、どうしようかと思つて居つたら、一夫(佐藤先生)が引つはつてこつちへ來いと云はれ、高等小學へ行く方の列へ入つたと云ふ事であつた。高等小學を卒業して中學へ行く時にも、父上はどうしても中學へやらぬと云はれ、連れて百姓すると云はれる。全體金光中學が出来た時に、私が入學し度く、一反か二反か田を借りて野菜でも作つてそれを賣つて學資を拵へ、勉強し度いと思ひ、先生に御相談した所、先生が「さうまでせぬてもよい。信心だけでやらせてやる」と云はれ、古事記、日本紀、源平盛衰記など讀み、八犬傳古今集、遠鏡など首引して研究した。山本豊師につき萬葉集を習うた。二十六年頃山本先生宅へ、麥飯辨當を持つて通うた事もあつた。正雄を中學へやるのに、貯金が十五圓あるから、月に五圓づゝ使うても、暑中休暇まではやれるから、やれるだけや



れき崩度四め爲の香水瓶石の田のこ 野き妻平久茂は物人
りたのもしき菜に日度五はるれ殘今 き築ら白に毎度のそ

らうと云うてやりかけた。その時御廣前先生から

「一日送りて立ち行けばらくであらう」

とお傳へがあり、一反の田畑も賣らずにやらせて貰へた。三十七年正雄東京へ行き、夏休みは東京ですると云ふ手紙であつたのに、畑先生から歸らせるとの電報が來、間もなく教會へ歸つて來た。車夫の肩にすがつてやうやく降りるやうな有様であつた。重い脚氣で六七十日立たれなんだがお蔭で全快した。

四十四年十月、博志が岡山で六高在學中に咯血した。修徳殿下の家に居つた時の事で、岡東教會の本郷さんがその事を云うて來て下された。縣病院へ入れまして看護婦も雇うて置いて來ましたと云うて來て下され、翌日先生も行つて下され、正雄も行き、先生院長に會はれたが、「駄目ぢやと云ふ。まあよう見て呉れと云ふに、いくら見てもはや三期ぢやから駄目ぢやと云ふがのう」と歸つて來られて、二階へ上つて下されて云は

れた。私も心配し御廣前へ参り、教祖御奥城へ参り、私は四神様の方を先に拜む習慣になつて居るが、四神様の前で、

「氏子は道の爲め／＼と二言目にはよく云ふが、吾子なら道の爲めにならぬものでも、生かしておき度いかや」

とのお知らせがあつた。

その解釋がわからず、もうお願も出来ず、しかし、やゝ安心もした。道の爲めになるものなら生かして下さらうしと思ひ、翌朝病院へ行つて見たら、頭に二つと胸に三つ水袋を掛けて居つたが、五寸位の痰吐きに昨晩一杯ではすまぬ程出ましたと看護婦が云ふ。言は云はれぬので、ぢつと聽いて居るばかりだつたが、信心の心で心配せぬ事、心を落付ける事を話して聞かせた。獨逸の醫學の大家の檢微鏡研究に依ると、平氣の時の血には勢ひ盛んな白血球が活動して居るが、心配して居る時は、同じ人の血にその勢がないと云ふ事を話して聞かせた。

三週間位で退院した。その後また本郷さん方で寝た事もあり、我家で寝て居た事もあつた。

大正二年一月三日に先生の齋主で靈神祭をして貰ふ爲めに、神様や靈神様の御掃除をしようと思ひ、自分でしかけ、靈舎の御屏を開いて中を見た時、驚き恐れ入つた。靈舎の靈璽が大神様のであつて、大神様のを開いて拜すれば、靈神様の靈璽がそこに入つて御座る。何時入れ代つたのか入れ代つたのを知らずに、大神様だとばかり思つて拜んで居つたのである。恐懼措く所を知らず、お詫びの出来るだけお詫びして、家内みんな連れて、お詫び参拜に教會へ参り、その事を御廣前先生に申上げると、先生は「そんな事があつたので、大病や心配があるのだらう」

と申されて、直ぐに御祈念して下され、御祈念が濟んでから仰しやるのに、

「喜んでお禮申せ。この度は新しい靈が祖靈殿へ入る所を神が身代り

に入つてやつたのぞとの御教ぢや」

四八

との事、その時は難有い事であつた。

それから山通りを家族一同と共に歸る途中、彼所此所を通りつゝ、此所でかういふ御教があつた。此所でかう云ふ御知らせを頂いたと云ふ事が思はれ、十幾年間、先生氣分になり、説教して歩いたり、事務を取つたり、役人になつたやうな氣分で、早く事務所へ出ぬと事務が滞つて居らう、早く出ぬと祭りの時間が來ると云ふやうな事ばかり考へ、信心の事はぬけてしまつて居つたと云ふ事が氣がついた。博志は一年休學して復校し、卒業する事が出來た。

立道が生れる前には、家内は衰弱して足が腫れ、えらくてならなんだらしい。中村時太郎氏を雇うて土臼と一緒にひくのに、一つ廻しては休まらずに居れぬ。川へ行つて五間か七間かの所を上つて歸るのに、途中二度も休まねば歸れなんだと云つて居つた。妊娠でえらいのぢやとばかり

思うて居つたらしい。生れた時には小さくて眼も開けず、乳も飲まず、五日目に私は山口縣の方へ巡教に出たが、九日ぶりに博志にはがきを書かせて出張先へ寄越した。乳を飲むやうになり泣き出しましたと云うて來たが、後で聞くとその時はまだ乳はよう飲まなんだのだが、さう云うて寄越したので、それから後に飲み出したのだと云ふ事であつた。

四十日して教會へ連れて參つた時、生れた時にはこれより未だ小さかつたかと驚かれた位であつた。乳が出ぬので米を噛んでそれを飲まして居つた。とてもよう大きくならぬと思ひ、それでも死んで他の子が五人もあるので、死んで可愛さうなとも云うて呉れる者はなからう。それが可愛いから、どうぞ助けて下さいと神様にお願ひして居つたと家内は云うて居た。愛子の時にも米を噛んで飲ませて育てた。

大正十一年十月十三日本部へ電話があり、信子が熱が高くて悪いから、お歸りなさいと云うて來、大祭にお參りして滞留して居た家内が、高屋へ

十四日に歸つた。だん／＼重くなる情報は來ても、御用があつて歸れぬ。二十二日夜より笠岡教會の大祭に行き、二十三日の朝、御廣前先生、金光より参り來られ、「信子さんが悪いからとて、正雄先生は姫井先生(醫師)を伴うて、今歸り居られました」

と云はれ、その時祝詞を書いて居た。間もなく御領から修行者來り、大先生(佐藤先生)が信子さんが悪いから早くお歸んなさいとお傳へせよと云はれました、と云はれ、祝詞も出來て居るから、神田さん(神田兼太郎氏)に齋主を頼んでおいて歸らうかと思ひ、靈神の所にて拜みしに笠岡金孝大神の靈が、

「お前うちをつとめて呉れ。わしが代つて行つてやる」

と云はれた心持がして、落ちついて大祭をつとめた。四時の汽車で歸り、「七日市」(後月郡 田部村)より車にて歸る途中、姫井さんの歸られるのに會ひ、車を降り、どうでせうかと聞いたたら、順に行つたら快くなられませう、と云は

れてやゝ安心した。

その後ずん／＼熱上りわるくなり、博志は毎日教會へ参り、氷を買つて來ては介抱して居た。月が替り一日に出立して九州へ行き、長崎を二ヶ所つとめて、五日武雄の教會所築落成式が濟み、直會宴の最中九時半頃、二階に上り居りしに、

「ノブコヤマイオモシゴキネンタノム」

との時間外電報來り、翌朝八時立ち、佐賀にて一席説教をつとめ、二時の汽車にて歸る途中、香椎古賀間にて百舌鳥の鳴くのを聞き、

悲しげに百舌鳥ぞ鳴くなる汝も家に

病める子おきて旅やすらしも

と詠んだ。夜行にて歸り、「兩備金光」へついたので朝の八時頃、そこへ白地さん(白地徳生氏)が出て居て呉れて、少しよろしう御座いますぜ、と云つて呉れた。それから蜜柑や卵が少しづつ喰べられると聞いたので、

「橋本」(高屋町内)で蜜柑を買って持つて歸つてやつたら、それを喰べる〜と云ひ、愁眉を開いた。

本部へ始めて参つたのは、明治十八年舊九月十日、講社結集祭と云ふのに、始めて参つた。教祖御三年祭であつた。一人参つた。「大原」(里庄村の内) 親戚ありへ寄つた。教殿の前の處にあつた大工小屋で祭をせられた。参拜者が三百人もあつたらうか。南の方に二間程の入口があつて、そこからのぞいて拜むのであつた。それ以來、春秋共本部の大祭には一回も缺けたことはない。藝備教會の大祭には、神戸地方へ出張を命ぜられて行つて居つたことがあつて、一回缺けたことがある。十九年から山上の近藤先生奥城の處で祭をせられるやうになつた。そこで三四年祭事まつりをせられてから、金乃神社祭典場が出来て、(たしか二十三年か)そこでお祭をせられるやうになつた。

四神様が、

「氏子が心配すると神様が安心なさるから、おかげにならぬ。氏子が安心して神に任せると、神が心配せられるからおかげになる」

と誰れかに御理解して居られるのを聞いたことがあつた。

四神様からお盃を頂いた事がある。本部の事務所で、佐藤先生が東京から、何かの運動が成功して歸られたので、そのお祝のあつた時、酒席でそらやらうと仰しやつてお盃を下されたので、これは頂いて歸つてよろしう御座いませうかと申上げたら、よろしいと、さわやかに仰しやつて下さつて頂いて歸り、そのお盃で御神酒を頂かせると、みんなおかげを受けて居つた。今に我家にある。

夢でよくお知らせを受けて居つた頃、正雄が二つの年五月の事、寢て居つて、夢を見た。池の堤から我家の屋根が相撲の土俵のまる位焼けて居るのを見、びつくりして起きて、庭の口を外へ出て見ると、風呂場がばつと燃えて居た。前々夜風呂を焚いたのに、前夜寢る時雨が降りさうなので、

そこへ麥藁を入れたのに、灰から火が移つたものと見え、危機一髪のところ、一人で水をかけて消したことがあつた。

大正六年十二月と思ふが、朝鮮の巡教から歸つて、本宅(金光町佐藤邸)へ御挨拶に參つたら、先生が仰しやるのに、

「よう歸つた。そちらの家には今朝竈の前に火が燃え上り、家内が、ばけつで水をかけて消したのを夢に見た。起きるのには未だ早い頃であつたが、お禮申してやつた」

と云うて下された。それから高屋の宅へ歸つて見たら、家内が云ふのに、

「丁度その朝未だ夜は明けて居らず、別に何の事もないのに、ふと起きて襖を開けたら、臺所一面明るうなり、もう火が燃え上つて居り、「火事ぢや」と聲を立てたら、丁度試験前で茂樹や立道が座敷で勉強して居り、飛んで歸つて、みんなバケツで水を運んで消しました。「火事ぢや」と云うた時、

「上の田」(近所の家)の多四郎さんが提燈を持つて前の道を通つて居り、「火事ぢやない、提燈です〜」と云つて提燈を振つて見せたが、いやかう〜と話したら、さうですかと云つて來て見て呉られました。恐しいことでした」と話した。

冬單衣で過して居た頃であつたと思ふが、教會から宅への歸り路に、

「吉野」(高屋町内)唐箕屋の前の橋の真中から足敷を數へ出し、そこで「淵」の傍の柿の木之處まで千足と思うたが、その通り千足、そこで又、倉田己之吉氏方の背戸の桐の木之處までが千足と思うたら、その通り千足。それから「降り口」の上の坂の真中程の檜の木(水炊か場)之處まで千足と思うたが、またその通りで、それからあとが七百二十足と思うたが、我が家へ歸り雨垂れの石に足をかけたまでが、丁度七百二十足であつた。そんなこともあつた。

一代の精神状態を云ふと、小學校へ行き出した時、何んだか變つたもの

になつたやうな、うか／＼出来ぬやうな氣がした。それから結婚した時、いよ／＼もつて重荷を負はされたやうな氣がした。お父さんになつた時、私は親になつたと思うた。教師になつた時、これは又どうも大責任が掛つた心持がした。

それから親に死なれて、自分が戸主になつた時と、四五回頭を押へられたと云ふか、頭をのし上げられたと云ふか、さう云ふ氣がした。

苦勞したこともあるが、常に前途に光明を認めて進んで來たので、苦勞と思へなかつた。

教會へ始めて參るやうになつたのは、前に云うた通り、十二年舊八月のことであつたが、それから時々參つたり、參らなんだりして居り、御理解のことを御説諭々々と云ふ時分であつた。二十一年秋末、冬初め、教會の臺所へ入らせて貰ふやうになつてから、先生や御廣前先生が御母上様を大切にせられるのを見せて貰つてから、金光教は尊い教ぢやなあと感じ

た。その頃は洋服を着たり、髭を生やしたりした人が、女の親に言をでも云ふものゝやうには思うて居らなんだが、先生が優しくお話を上げてなさる。又御廣前先生が、お子様がどんなに泣いて居られても、お雑炊の出來たのでも、菜つ葉の煮物でも、必ず御本家へ持つて參られ、御母上様にお初穂を上げられぬと召上られなんだものである。それを見せて貰つてから深く感じた。

藝備教會所と云ふものが無く、先生御夫婦が居られなかつたら、我家はどうなつて居るか、わかつたものではない。

經歷追加 (自筆手記)

五八

一、鬚(髭)ウハヒゲ(上) 明治三十三年本教別派獨立の記念

一、髯 アゴヒゲ(下) 明治天皇御大喪儀(九月十三日)上京の記念

一、冷 浴 三十二年教父(佐藤範雄先生)別派獨立請願全權委員

として上京せられし其年冬より始め今日に至る。

冷浴を中途休みしは大正九年三月九日より四月六日まで臥床のため一回、外には痔又は熱發にて數回數日ありしのみ。

一、明治四十四年八月二十四日朝六時、木綿崎山上(フラフ竿の東上)にて靈感

天地の精になれる吾は、今正に宇宙の中心に立ちてあり。斯くて一呼吸一脈搏毎に、生神の靈德に率かれて、大宇宙大天地に波動し影響しつゝあり。大天地の精靈亦生神教祖を通して刻々に吾の眞我に來り加

り、あるを覺ゆ。(茂久平四十六歳)

一、昭和二年一月二十二日午前四時四十分、大教會所に參拜祈念中に心に浮びしこと。

「予生神金光大神と神號を奉稱して拜禮を捧ぐることに、且に五十年に垂んとす。然るに心の活き又は身の行にして聊かにも教祖に肖たる所ありや」と省みて實に恐懼措く所を知らず。而して奥城に詣し、金乃神社に拜して、石鳥居近くまで下向せし時フト「生神に吾にも肖奉れる點一つあり」と思ひ出ぬ。そは「若年の時より着物につきて美も粗も曾て意に介したることなし。この一事のみは、教祖に肖かよへるにはあらざるか。終生衣服に關して些の不自由も不平不満もありしことなし。これ神意に適へるが故に、心中満足を得るのおかげ受け居るならん」と大に嬉しさを覺えき。

次にまた修徳殿坂の中程まで下りて、更に一事あるを知りぬ。「予は未

だ曾て投機思惑して僥倖を夢みしこと断じてなきなり。こも亦生神に倣ひ奉れる一徳なるべし」と。何んとならば物價の騰落にも鑛山の盛衰にも全く無關心なるが故に、只一厘の儲もせざる代りに、損失を受けしことなきなり。

一、日時不詳。道に出でんか家に働かんかの問題容易に決せず。其の時誠に恐れ多きことながら、吾果して神に使はるゝ天分ありや否やを知らんと欲し、臺處の中央にありしカンテラの燈を一心凝らして睨みつけて、一分間もたゝぬ間にフツリと風もなきに消えたり。其の間隔凡そ一間半もありしならん。

一、明治二十八年六月、始めて藝備分所より黒田徳次郎師に隨行、吳、廣島、讃岐西部、伊豫東部、丸井(今の紀伊教會の前身)箕之浦、關川、中村、天滿等(この四國へは本部巡教)に出立せんとする時、父上の許を得ること中々、難事なりしが、其の時に予誓ひし一事は「今後断じて家の財物金錢を持

ち出さぬ事」。こは當時信心とし云へば、財産を蕩盡するものゝ如く考へられ居たりし状態にありたるに鑑みしに依る。爾來予の小使錢も子女の教育費も悉く信心の爲め道の爲めと思ふが故に、一旦誓ひし精神に基き、父上歸幽後も米麥又は薪炭料の山林立木等を賣りし金錢を使用せしことなし。父に誓ひしは祖先の靈に誓約せしものとして、一生約を守る決心の堅固なればなり。

但大正十四年に「宮賀」及「大曲」の向ふの山樹木賣渡金を、金光邸宅建築費支拂に數百圓使用せしは、正雄、一郎と一家直系の相續者の住宅なるが故に、祖先の恩恵に浴せしめ置く方可なりと思惟せしに依る。

一、賭博一回、散財一回、

賭博は「吉谷」大村長次郎宅(大仙様へ上る少し下方にありし時のこと)年月不詳。舊正月の或農業休日に寶引と稱する三尺位の麻綱を人數丈け持出し、夫れに一個の玉をつけ、其の玉を引當てたるものを勝と

なすもの。其の時予は同一回と勝負を争ふに大勝に歸し、各人に一圓又は一圓五拾錢、二圓と貸方となりしが、遂に一錢も受取ること能はずして止みぬ。其の時以爲若し予にして負けとなりたらんには、人々必ず嚴談して支拂はしめしならんを、予は心弱く、只一言の催促も爲し得ず、斯る性質にては再び爲すべきことにあらずと觀念し、斷じて爾來斯る席に遊びしことなし。

次に散財は、岡本孝三郎、花岡久米吉、岡本秀吉其の他數人、「角仲」(高屋町市角)にて一夕酒肴を命じ、美女兩三人、三味線太鼓等にて大散財に無理矢理に誘出されしことあり。其の酒宴中の不氣味不愉快、實に恐怖に襲はれ、言語に絶したり。後にて惟ふに顔色蒼白、何とも言へぬ貧弱なる姿なりしならん。これも只一度のみにて、其の後誰ありて誘ふものもあらざりしなり。

あとがき

この一篇は、父が今年一月、金光の宅で私等兒孫の爲めに話して呉れた、自身の物語であります。自分の事主として信心に導かれた前後の事を話して聴かせようとは、大分前から云つて居た事であり、私等もどうぞ聴かせて貰ひ度いと願うて居つたのですが、よい折が無くて過して居たのを、この一月に決行したのであります。その時にも差支へてよう集らぬ者があつたのですが、復た重ねてして貰つてもよいから、兎も角も今度は是非にと云つて、話して貰つたのですが、今から思ふとようしておいて貰つた事と思ひます。萬一あの時にも、又いつかの時にと云ふやうな事を考へて延ばして居つたら、取り返しのつかぬ残念な事であらうと思ひます。

話は三日の午後から、四日の午前午後へかけてして呉れましたので、聴く者は母を始め弟妹、子供達、その外當時宅に居て呉れられた二三の人々でありま

した。父は話の途中來客の爲めに遮られると困るから、失禮だけれども、面會をお断りして置けと云ひつけ、二日間一族の者だけ、父の膝下に侍したのでした。

聞き手が少いのですから、固より小さな聲でしたが、心はこめて居たやうで、一時間半か二時間も話すと、

『まあ少し休んでからにしようや』

と云つてお茶を入れたり、又それ位話すと、

『大分また話したのう。少し休むかな』

と云つたりして、ぼつり／＼話を進めて参りました。さうして四日の午後、一通り話し終つた時には、自分でも満足さうに見えました。

筆記は私がありました。そしていつか暇をこしらへて整理し、父の手許に出して置いて、訂正もして貰ひ、増補もして貰はうと思つて居たのですが、そんなに急ぐ必要もないと思ひ、他の事にかまけて、その儘に過して居りました。しかし父としても、まだ何か思ひ出す事もあるかも知れない。若しあつたら必

覺えに書きつけておいて下さいと頼んで置いたのです。ところが何事にもさまりのよい父は、私のさう云つて頼んだ事も、聞き捨てにはせず、程經て私の居間へわざ／＼やつて来て、

『まあこれ位のものぢや』

と云つて、半紙野に四五枚書いたものを渡して呉れました。それがこの卷末の『經歷追加』であります。その時も私は、何もそんなに早く私の方へ渡して呉れんでも、もつと自身の手許に留め置いて、永い生涯の事だから、思ひ出す事も次々にありさうなもの故、それを暇に任せて書いておいてくれ、ばよいのにと、心の中では思つたのですが、父に向つては、

『はあ、さうですか。それは難有う』

と云つて受取つて、それも前の話の筆記を入れて居る袋の中へ一緒にして、その儘藏つて置いたのです。

ところが三月廿三日父は亡くなつてしまひました。そして廿六日に金光の彌廣會館で告別式をして頂いて、藝備教會に歸り、廿七日教會葬を受けて、五

十年育てられた先生の温い御手で最後の納めをして頂き、親族故舊に守られつゝ、これを最後に教會の御門を出て、故郷高屋の宮ヶ谷なる生家に歸り、祖先の墳墓に永久に眠りまして、幸福な一生の終りを全うしたのであります。

想へば幼年にして道を求めて谷を出で、教會で育てられ、中年に金光の靈地へ召し出されて、全國各地の良き人々に愛せられる事になり、その金光で最後を告げ、教會に歸り、更に宮ヶ谷に歸り、始め出て行つたと同じ道を踏んで歸るべき所へ歸つたのでありますから、父として只感謝と満足とより他には、なんにもあるまいと思ふのであります。

金光で父の最後に別れを告げてから、遺骸を宮ヶ谷の奥城に納め終るまで、他の事は皆して呉れられる方々がありましたので、私は大抵父の傍に侍して居る事が出来、この上ない仕合せをさせて貰つたのであります。その間又私は常に父の話の筆記を自分の懐ろに入れて居りました。私に取つてこれより大切なものはないと云ふ氣持で、それを抱いて居りました。そしてそれ程大切に思ふ事の出来るものを残して呉れた事に對して、父に感謝して居りま

した。

葬儀その他の事が一段落ついたら、その筆記を整理して、先生(私等一族の間で先生と申しますのは、佐藤範雄先生であります)にも見て頂かう。そしてお許を得たら、印刷に附して、父が生前恩愛を受けし方々にも見て頂かうと思つて居た矢先、先生が大患に罹られ、何も彼も一擲して只管御本復を祈るより外餘念なき日が續きました。幸にして先生は御全快遊ばされましたので、やうやく、父の話の筆記をお目に掛ける事が出来るやうになりました。先生はそれを手にして云はれますのに、

『よう話して居つたのう。版にする前に見てやり度いが、未だこの健康では、それが出来さうもない。しかし大抵間違つた事は云はぬ男で、物を飾つて云はぬ性質であつたから、大方ありの儘を話して居らう。あれで雄辯にあらず、訥辯にあらずと云ふ男ぢやつたからのう。然しひよつと感違ひ、間違ひなどして居るところがあつたら、あとで直してやらう』

『序文でも書いてやり度いと思つて居つたが、書けば限りのない事だし、それ

もこの健康ではむづかしいから、この歌を書いてやる事にしよう』
 とて巻頭の一首を詠み與へられました。そして一篇の名も『父の語り草』
 とつけて下さいました。

父は先生あつての父でありました。十四の年から六十四まで、只一筋に愛せられたのであります。さうして人生の最後である所の葬儀までして頂いて、完全に先生のものになつてしまつたのですが、かうして又、自分の事を話して置いたものに、いろ／＼と先生の御心添を頂いて出版するやうになつた事を知つたら、どんなにか嬉しく思ひ、難有いと思ふ事でありませう。

父は先生御夫婦に愛せられたばかりでなく、辱知の方々に愛せられた事も亦實に深く篤く、生前口癖のやうに云つて居りました。

『私はどうしてこんなに皆さんに大切にされて貰へるのであらうか。他所の人は本當に親切が深いと思ふ。私などはとてもこんなに人に親切をようせぬがなあ』

とよく云つて居りました。それは父の死に依つて一層はつきりわかりま

した。歸幽の前後、父の爲めに寄せられし各方面からの厚意は、筆舌に現はす事の出来ない深厚なものでありました。父は心からなる親切の海の中に生かさねもし、又死んでも行つたものとしか、思はれぬのであります。

この一篇は前にも申しました通り、私達子供等の爲めに父が話して呉れたものでありますから、公に亘る方面の事は少しも申して居りませず、又私事でも當時の聞き手であつた私等にだけしか分らない事もありました。他の方々には一向関係のない事が多いのであります。父を愛して下さる御心から御一覽下さいますなら、父もさぞ喜ぶであらうと存じまして、一本を座右に献ずる事と致しました。缺禮の段は御諒恕を願ひ上げます。

それでこの中の寫眞は、巻頭の數葉を除いて、他は皆私の高等小學時代の友原正一氏が二度も山の中まで來て寫して下さつたものであります。お蔭でよい記念になりました。厚く御禮申上ます。

印刷製本など、その方の事は、凡て東京篠山書房森本直次郎氏のお世話になりました。森本さんは、父の『御理解感話』を出してくれられた方で、あの本

が出来た時位、父が喜んだ事は私も知りません程で、そんな事で、生前から深い親しみを感じて居つたのですから、今度森本さんのお世話でこれが出来ました事は、父も満足であらうと存じます。

それから今一つお断りして置かねばならぬ事があります。それはこの話の中に父が使つて居ります言葉に、時々一般に通じ難い方言が交つて居る事なのです。それはもと話そのものが、私等一族の者ばかりの所でしたものですから、すつかり打解けてしまつて、少しも改つた気分がなく、云はゞお國訛り丸出しでありましたので、そこに又云ひ知れぬ親みをもつて話す方も話し、聞く方も聞きましたので、それをこんなに版にして皆さんに見て頂くに就ては、改めて標準語に直した方が本當であらうとは存じましたけれども、父と私等との間の親しみを、その儘に残し度いと思ひます私等の勝手から、大方その儘にして置いたのであります。お読みづらいかと存じますが、どうぞお許しを願ひます。

昭和四年八月

正 雄 識

昭和四年九月二十二日印刷
昭和四年九月二十五日發行 (非賣品)

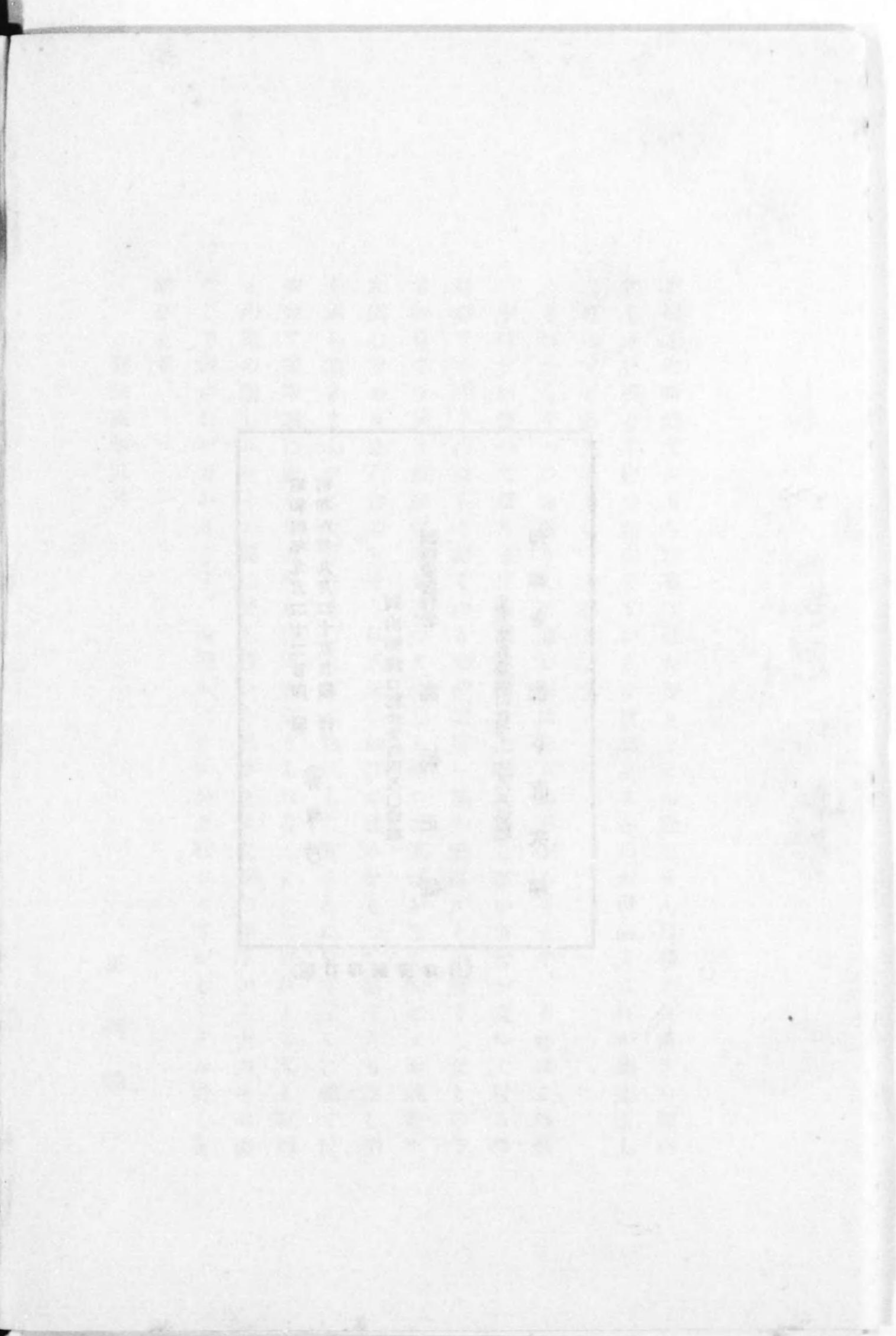
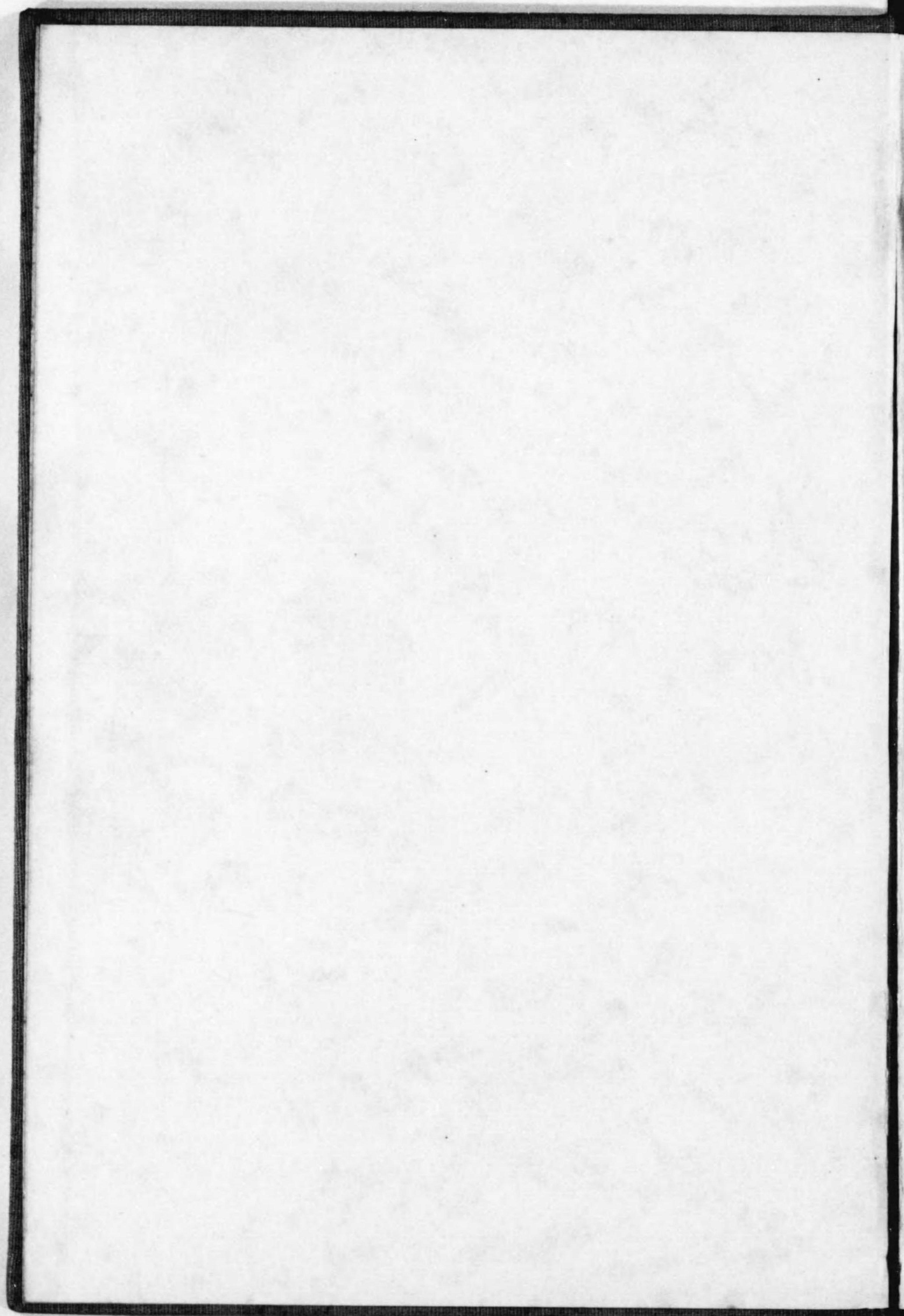
岡山縣淺口郡金光町四八〇番地

編輯發行者 高 橋 正 雄

東京市外巢鴨町宮下一六八八番地

印刷者 森 本 直 次 郎

(行印所刷印口溝)



終

